兵庫県文化財調査報告　第330冊

朝来市山東町

方谷古墳群

－一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日和田山道路Ⅱ）建設に伴う発掘調査報告書－

平成20（2008）年3月

兵庫県教育委員会

朝来市山東町

方 谷 古 墳 群

－一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日和田山道路Ⅱ）建設に伴う発掘調査報告書－

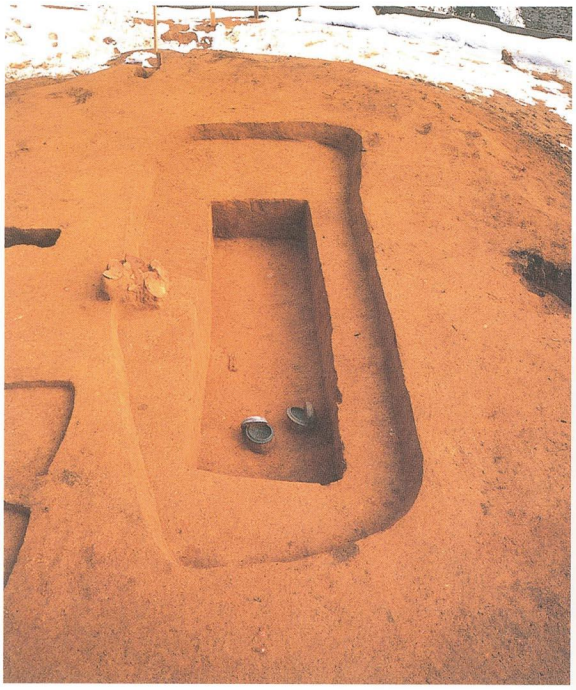
平成20（2008）年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

方谷古墳群遠景（東から）

方谷古墳群近景（北から）

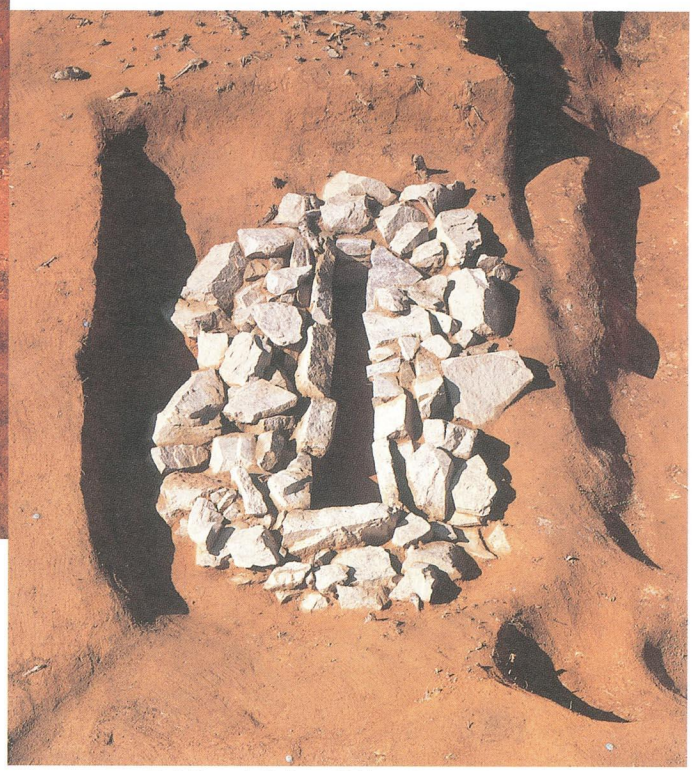
巻頭図版２



４号墳（東から）

４号墳出土遺物

５号墳第２主体部（南東から）



５号墳第２主体部石棺検出状況（南東から）

例　言

1．本書は兵庫県朝来市山東町字方谷に所在する方谷古墳群の発掘調査報告書である。兵庫県文化財調査報告の第330冊にあたる。

2．発掘調査は一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日和田山道路Ⅱ）建設に伴うものである。建設省近畿地方建設局豊岡工事事務所（現国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所）の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。

3．発掘調査は、平成14年度に兵庫県教育委員会が実施し、同埋蔵文化財調査事務所（現兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部）　藤田淳・小川弦太が担当した。

4．遺構の実測は、調査員と調査補助員が行った。遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部）嘱託員が行った。

5．写真は遺構を調査員が撮影し、遺物については株式会社タニグチフォトに委託した。

6．本書の挿図第２図「周辺主要遺跡」は、国土地理院発行の1/25,000「矢名瀬」を1/50,000に縮小して使用した。

7．本書で使用した標高は東京湾平均水準（T. P.）を基とし、方位は国土座標第Ⅴ系の座標北を示す。座標値については世界測地系である。

8．本書の執筆は小川が行い、編集は嘱託職員村上京子・池内くみ・長濱重美の協力を得て小川が行った。

9．調査で出土した遺物・写真・図版等の資料は兵庫県立考古博物館魚住分館（明石市魚住町清水630－１）において保管している。

10．現地調査の際には、朝来市教育委員会の田畑基氏・中島雄二氏からご指導、ご協力をいただいた。

凡　例

1．遺物は種類ごとに通し番号をつけているが、鉄器にはMを冠し、土器との区別を行っている。

2．土器は種別によって断面の表現を変え、須恵器は黒塗り、土師器は白抜きで示している。

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と環境…… 1

第１節　地理的環境…… 1

第２節　歴史的環境…… 2

第２章　調査の経過…… 4

第１節　調査に至る経緯…… 4

第２節　調査体制…… 4

第３章　調査の結果…… 7

第１節　古墳群の概要…… 7

第２節　１号墳…… 7

第３節　２号墳…… 11

第４節　３号墳…… 13

第５節　４号墳…… 15

第６節　５号墳…… 21

第７節　土　坑…… 26

第４章　総　括…… 29

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置…… 1

第２図　周辺の遺跡…… 3

第３図　調査前地形測量図…… 5

第４図　方谷古墳群全体図…… 6

第５図　１号墳平面・断面…… 8

第６図　１号墳第１主体部…… 9

第７図　１号墳第２主体部…… 10

第８図　２号墳出土遺物…… 11

第９図　２号墳平面・断面・主体部…… 12

第10図　３号墳主体部…… 13

第11図　３号墳平面・断面…… 14

第12図　(８)内部の布目状痕跡…… 15

第13図　３号墳出土土器…… 15

第14図　４号墳平面・断面…… 16

第15図　４号墳墳丘断面…… 17

第16図　４号墳出土土器…… 17

第17図　４号墳第１主体部…… 18

第18図　第１主体部出土鉄器…… 19

第19図　第１主体部出土土器…… 19

第20図　４号墳第２主体部…… 20

第21図　５号墳平面・断面・溝断面…… 21

第22図　５号墳出土鉄器…… 22

第23図　５号墳第１主体部…… 23

第24図　５号墳第２主体部……24、25

第25図　ＳＫ１・ＳＫ２…… 26

第26図　ＳＫ３…… 27

第27図　ＳＫ４・ＳＫ５…… 27

第28図　ＳＫ６…… 28

第29図　土坑出土遺物…… 28

写真図版目次

巻頭図版１　方谷古墳群遠景・方谷古墳群近景

巻頭図版２　４号墳・４号墳出土遺物・５号墳第２主体部・５号墳第２主体部石棺検出状況

写真図版１　古墳群調査前全景
古墳群調査後全景

写真図版２　１号墳
古墳群調査前近景
古墳全景
第２主体部

写真図版３　２号墳
古墳全景
主体部
貼り石

写真図版４　３号墳
古墳全景
主体部
主体部遺物出土状況

写真図版５　４号墳
古墳調査前全景
古墳全景
第１主体部

写真図版６　４号墳
第１主体部遺物出土状況
第１主体部高坏出土状況
第１主体部須恵器坏出土状況
第１主体部刀子出土状況
第２主体部
周溝断面、遺物出土状況

写真図版７　５号墳
古墳調査前全景
古墳全景
墳頂部全景

写真図版８　５号墳
第１主体部、第２主体部近景
第１主体部鉄器出土状況
第１主体部全景

写真図版９　５号墳第２主体部
主体部検出状況
蓋石検出状況
蓋石除去状況
石棺検出状況

写真図版10　土坑
ＳＫ１
ＳＫ２
ＳＫ３
ＳＫ４
ＳＫ５
ＳＫ６

写真図版11　２号墳・３号墳出土遺物

写真図版12　４号墳出土遺物

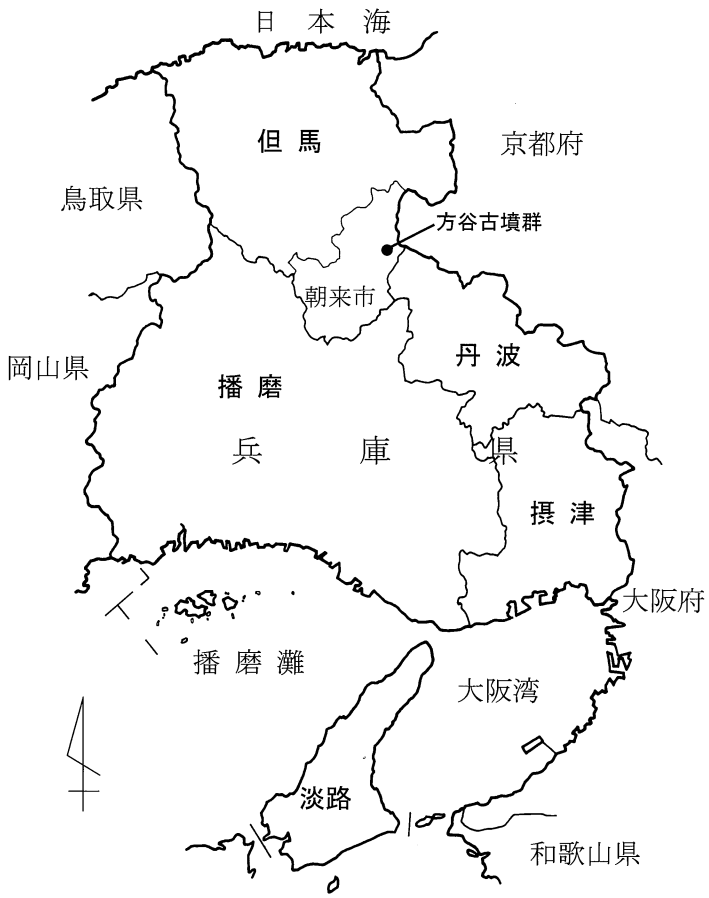
写真図版13　４号墳・５号墳・ＳＫ１出土遺物

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

方谷古墳群が立地する朝来市山東町は古代律令制下では但馬国朝来郡に属し、現在は兵庫県の北東部、京都府と接する山間の地にあたる。

朝来市山東町は面積49.16km²、人口6,318人(2004年)。合併前の朝来郡４町では和田山町、朝来町に続いて３番目に人口の多い地域となる。2005年４月、和田山町、朝来町、生野町、山東町の朝来郡４町が合併し朝来市となる。合併後の朝来市は総面積402.98km²、人口34,791人(2005年)。



第１図　遺跡の位置

方谷古墳群は山東町東部に位置し、東２kmには但馬と丹波の旧国境となる遠坂峠、南約3.5kmには標高962mの粟鹿山、北西3.5kmにはＪＲ山陰本線の矢名瀬駅がある。遺跡の南には柴川が西流し、山東町内において与布土川と合流する。与布土川は和田山町内で円山川となり、北流し日本海へと通じる。

遺跡が立地するのは兵庫県と京都府の府県境となる山地である。この山地は標高250m～500m程度の山々からなり、そこから南側へ派生した幾本もの尾根のひとつに古墳群は築かれている。この場所は、与布土川とその支流によって形成された山東盆地の東端にあたり、古墳群の西側には山東盆地が一望できる。山陰道が通るこの地は但馬への出入り口となる場所であり、古来より交通の要衝であった。

＜参考文献＞

『角川日本地名大辞典28兵庫県』　角川書店　1987

『日本歴史地名大系第二九巻Ｉ　兵庫県の地名』　平凡社　1999

朝来市ホームページ　http://www.city.asago.hyogo.jp　2007

第２節　歴史的環境

方谷古墳群のある朝来市山東町は、平野部においては弥生時代中期から集落が営まれ、丘陵尾根上や谷などに数多くの古墳が築かれた地域である。古代には町内を山陰道が通過し、粟鹿駅家が設置される。また、その近くには式内社粟鹿神社が鎮座する。中世には、羽柴秀吉の但馬攻めの際に、山陰道への押さえとして若水城(19)が築かれるなど、交通の要衝としての性格が色濃く遺跡に現れる。

山東町内では旧石器および縄文時代の遺跡はほとんど発見されていない。発掘調査においては、柿坪遺跡(７)、粟鹿遺跡(21)から縄文時代後期～晩期の土器・石器の出土例が知られる。

弥生時代は中期以降、柿坪遺跡(７)、仲田遺跡(５)が知られている。柿坪遺跡は引き続き古墳時代へ続く集落であるが、仲田遺跡は弥生時代中期後半に限られる遺跡である。また、今回の高速道路建設に伴って発掘調査が行われた芝ヶ端遺跡(11)では弥生時代中期末の竪穴住居跡３棟と墓、粟鹿遺跡(21)では竪穴住居跡約30棟、方形貼石墓などが新たに見つかっている。

弥生時代後期では森向山遺跡、五反田遺跡が知られる。森向山遺跡は山東盆地南部の与布土川左岸に位置する遺跡である。和田山町へ抜ける東西の谷の入り口にあたり、竪穴住居跡などが発見されている。五反田遺跡は、越田から粟鹿へと抜ける小さな谷の西側斜面に位置する。これら集落を望む丘陵尾根上には墳墓群がある。柿坪中山古墳群(８)の弥生墳墓は、柿坪遺跡の南に位置する独立丘陵上に築かれた墳墓群である。芝花古墳群(12)は柿坪古墳群の東にある丘陵北側斜面に位置する。古墳群と同じ尾根稜線上から21基の弥生時代後期の墳墓群が検出された。

古墳時代になると、集落遺跡では柿坪遺跡(７)、粟鹿遺跡(21)が知られる。柿坪遺跡は山東町だけでなく、和田山町などを含めた南但馬の中心集落として存在する。平成11年度に行われた発掘調査では、古墳時代全般にわたる竪穴住居跡約120棟や掘立柱建物跡34棟、古墳時代中期の「錣入母屋造り」の大型掘立柱建物(床面積201㎡)を中心とした建物群などが検出された。これらは豪族や首長の居館、さらには祭祀場としての性格が考えられるものである。山東町東部、粟鹿神社の北側に位置する粟鹿遺跡では、古墳時代初頭から飛鳥時代におよぶ竪穴住居跡が検出されている。造り付けの竈を有するものが多く、その導入時期は須恵器導入とほぼ同じ時期であることが判明している。

山東町域の古墳は、兵庫県遺跡地図によると650基を超える登録がされている。それらの多くは群集墳であり、盆地を望む丘陵上に多く築かれている。また、これまでは前方後円墳などの首長墓は発見されていなかったが、平成13年度に行われた若水古墳(18)の調査によって、この古墳が長径40ｍ、短径35ｍを測る楕円形の墳丘を造り出した古墳時代初期の王墓であることが判明した。２つある主体部の１つからは、飛禽鏡、内行花文鏡などが出土し、和田山町城の山古墳に先行する古墳と考えられる。それまで不明であった南但馬における古墳時代初期段階の首長系譜を考える上で重要な発見となった。

山東町内の古墳は、６世紀前半までの竪穴系を埋葬主体とする初期群集墳と６世紀後半以降の横穴式石室を埋葬主体とする後期群集墳に大きく分けられる。前者は、山東町中央部に存在する盆地あるいは小河川によって形成された各谷を見下ろすことのできる尾根上に立地する特徴があり、柿坪中山古墳群(8)や若水古墳群(18)などがあげられる。後者は、各河川上流部の山麓あるいは谷部に立地する特徴があり、西谷古墳群(22)、追間古墳群があげられる。なかでも、柿坪中山古墳群は柿坪遺跡の南に位置し、４世紀後半から５世紀中頃の山東町を代表する古墳群である。２号墳、１Ａ号墳、３号墳、４号墳からは方谷古墳群５号墳と同じ小竪穴式石室が見つかっている。

歴史時代になると、柴遺跡(26)、方谷遺跡(27)、粟鹿遺跡(21)、若水城跡(19)など今回の道路建設に伴い調査が行われ、新たな所見を得られた遺跡が多い。柴遺跡は方谷古墳群に隣接する遺跡であり、「驛子」と書かれた木簡が出土した。山東町柴は粟鹿駅家の推定地のひとつであることから、この木簡の出土意義は大きい。方谷遺跡は、方谷古墳群の東の谷、柴遺跡の北に位置し、律令期の須恵器・土師器などが出土している。粟鹿遺跡では、中世の粟鹿神社への参道である石敷きの道路遺構が検出された。若水城跡では、石積み虎口や主郭を取り囲む横掘が見つかり、「織豊系城郭」としての特徴が認められた。但馬攻めの際に羽柴秀吉が築いた陣城のひとつと考えられている。

＜参考文献＞

山東町教育委員会　『持谷古墳発掘調査報告書』　1988年

兵庫県教育委員会　『平成11年度　年報』　2001年

兵庫県教育委員会　『平成12年度　年報』　2002年

兵庫県教育委員会　『平成14年度　年報』　2004年

兵庫県教育委員会　『兵庫県遺跡地図』　2004年

兵庫県教育委員会　『加都遺跡Ⅰ』　2005年

兵庫県教育委員会　『加都遺跡Ⅱ』　2007年

兵庫県教育委員会　『但馬の王墓　茶すり山古墳調査概報』　2003年　学生社

1 大師山古墳群
2 城ノ越古墳群
3 寺山古墳群
4 宮ノ谷古墳群
5 仲田遺跡
6 永徳遺跡
7 柿坪遺跡
8 柿坪中山古墳群
9 越田段古墳群
10 越田四辻遺跡
11 芝ケ端遺跡
12 芝花古墳群
13 柿坪向山古墳群
14 馬場古墳群
15 和賀向山古墳群
16 切戸山古墳群
17 持谷古墳
18 若水古墳・若水古墳群
19 若水城跡
20 若水古墳群
21 粟鹿遺跡
22 西谷古墳群
23 大同寺古墳群
24 大原１号墳・２号墳
25 方谷古墳群
26 柴遺跡
27 方谷遺跡
28 柴城跡
29 滝ノ口北古墳群
30 滝ノ口古墳群

第２図　周辺の遺跡（Ｓ＝1：50,000）

第２章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

建設省(現：国土交通省)は広域交通ネットワークの形成によって、産業・経済を発展させ、地域利便性の向上を目指して北近畿豊岡自動車道(起点：兵庫県豊岡市、終点：兵庫県丹波市春日町)の建設を計画した。一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱは、北近畿豊岡自動車道の一端を形成する、朝来市山東町遠阪峠から朝来市和田山町和田山ＪＣＴを結ぶ高規格幹線道路である。

兵庫県教育委員会では、上記計画路線内の分布調査を平成５年に行い遺物散布地を発見、周知した。その中で№104地点に周知の埋蔵文化財包蔵地であった「方谷古墳群」を発見した。分布調査の結果を受け、道路建設によって遺跡の現状が改変される箇所を中心に、平成12年度に確認調査を行い事業予定地内に５基以上の古墳が存在することを確認した。

以上の結果を受けて、平成13年度に方谷古墳群の本発掘調査が行われた。

第２節　調査体制

調査は平成５年の分布調査に始まった。本節では分布調査の結果を受けて実施された平成12年度の確認調査と平成13年度の本発掘調査および平成17年度からの整理作業について概要を述べる。

確認調査

遺跡調査番号　2000203

調査担当者　　種定　淳介・大崎　晃司・池田　征弘

調査期間　　平成12年７月10日～平成12年７月28日

調査面積　　194㎡

№104地点として周知された範囲に合計20箇所のトレンチを設定し調査を行った。その結果、丘陵尾根のトレンチで石棺、木棺、周溝を確認した。さらに古墳に伴う須恵器、土師器が出土した。

本発掘調査

遺跡調査番号　2001195

調査担当者　　藤田　淳・小川　弦太

調査期間　　平成13年12月11日～平成14年３月15日

調査面積　　1,791㎡

本発掘調査実施前に、重機が木材伐採や運搬のために尾根上へ進入していた。そのため、尾根上には４号墳の北側まで重機の跡が残り、部分的に表土が削られていた。

調査区内の木材伐採を行った後、調査前の空中写真測量を行い、地形の把握を行った。発掘調査は、古墳の推定位置を中心にして、尾根上に土層観察のための土手を残し、人力で掘削を行った。５号墳では石材が散乱していたため調査前に電気探査を行った。その結果、広範囲に石材の分布が確認されたため、石室が築かれていることが予想された。

調査は、５号墳から行い、４，３，２，１号墳と進めた。５号墳は石室の実測のため、他の古墳と調

査は並行して行った。５号墳第１主体部では、横断面に杭状の痕跡が確認されたため、土層のはぎ取りを行った。

整理体制

出土遺物の洗浄、ネーミングなどは現場事務所で実施し、報告書作製に伴う本格的な整理作業(遺物実測、復元、トレース、図版作製など)は兵庫県立考古博物館荒田分室(旧：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所)および、兵庫県立考古博物館で実施した。

平成18年度

遺物の実測・復元を行った。

整理保存班　岸本　一宏・岡本　一秀

嘱　託　員　実測：村上　京子・溝上　くみ

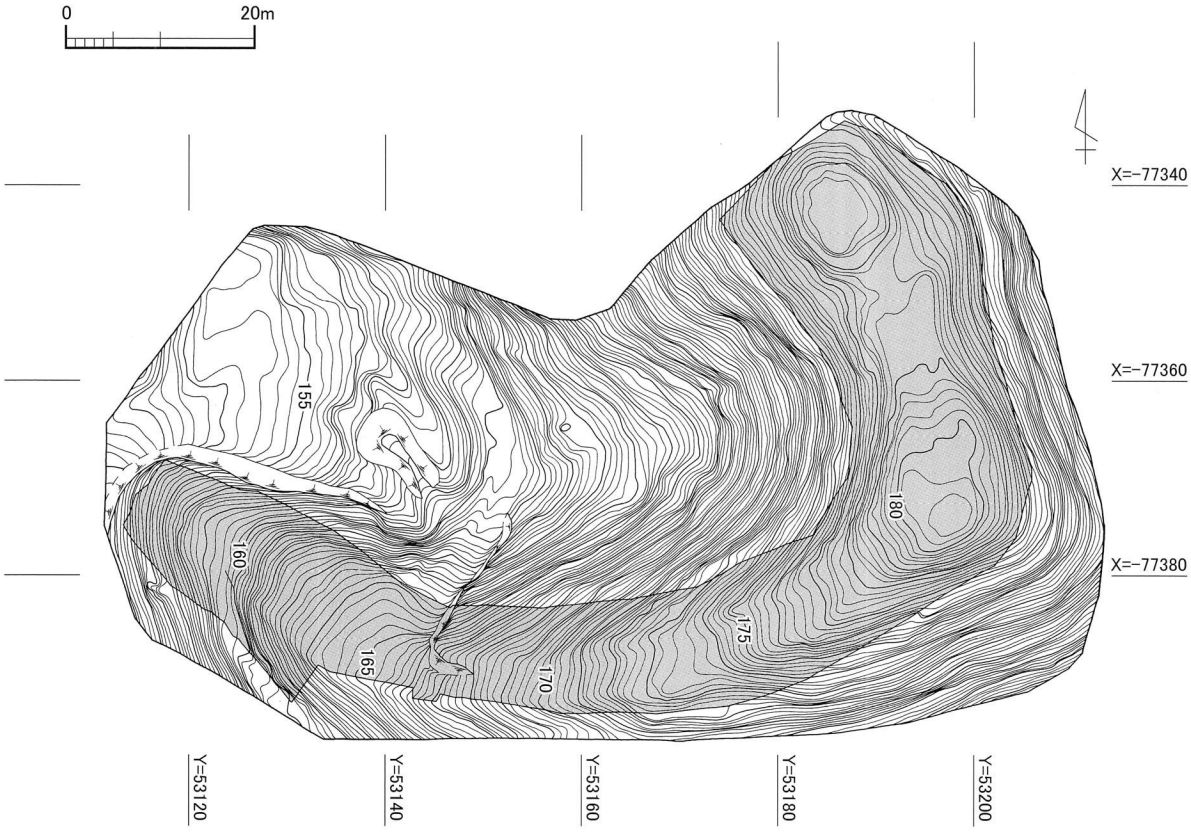
復元：早川亜紀子・伊藤　ミネ子・家光　和子・三好　綾子・奥野　政子

平成19年度

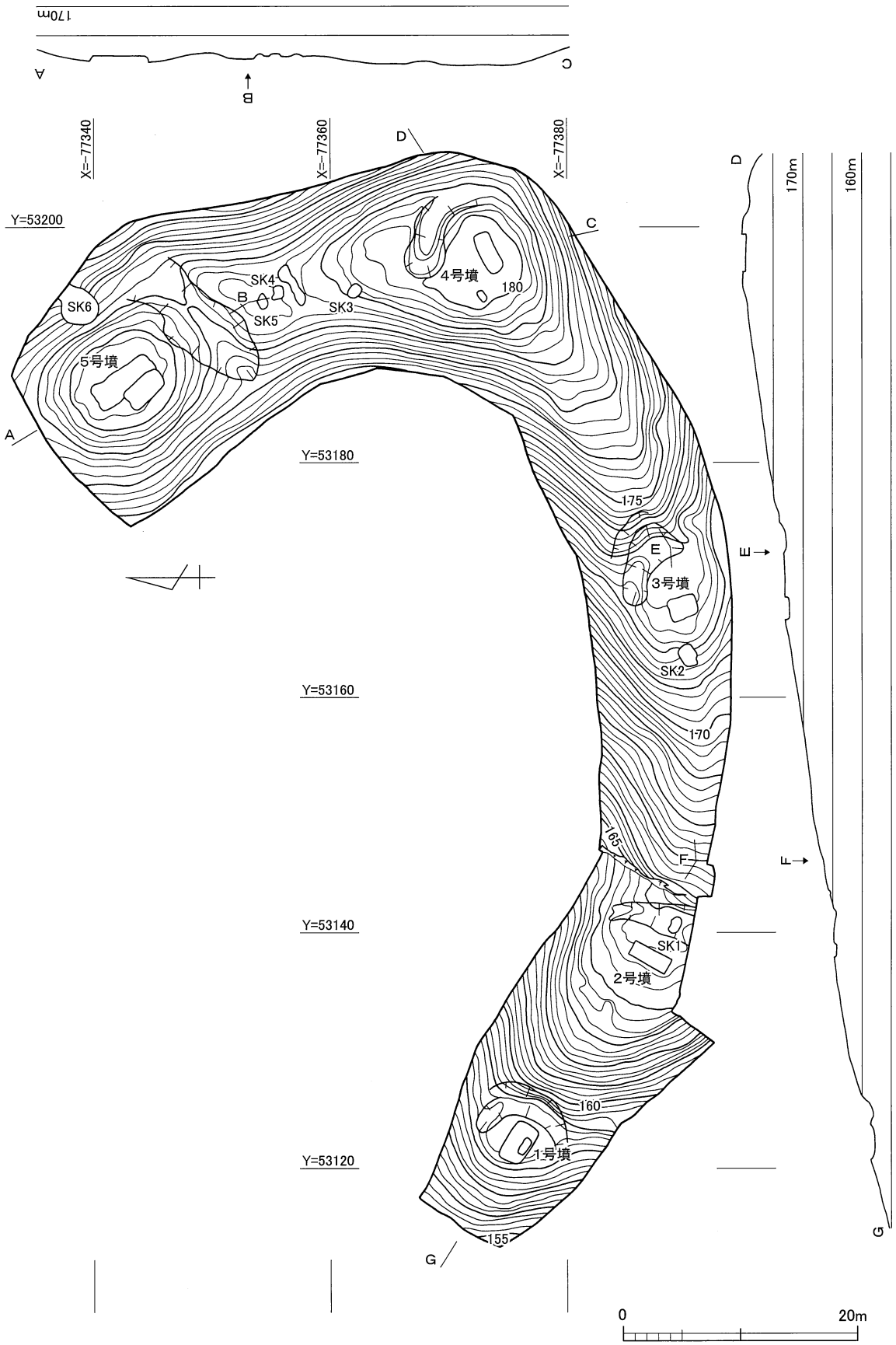
トレース、遺構・遺物図版作製、遺物写真撮影、写真図版作製などの報告書編集作業を行った。

整理保存班　岸本　一宏・岡本　一秀

嘱　託　員　村上　京子・池内　くみ・長濱　重美



第３図　調査前地形測量図



第４図　方谷古墳群全体図

第３章　調査の結果

第１節　古墳群の概要

方谷古墳群は山東町の東端、柴集落の北側にある西向きの尾根上に位置する。古墳群は、昭和60年代にはその存在が知られ(1)、1999年発行の山東町遺跡分布地図には尾根の下方側から１号墳、２号墳、…、８号墳と記されている。分布調査にてこれらに該当する地形の高まりや平坦面を確認している。確認調査では今回の調査範囲内には５基以上の古墳が存在するとされたが、本発掘調査の結果、５基であることが判明した。今回調査した５号墳の背後の尾根上にはさらに３基の古墳が存在する。

５基ある古墳のうち、１号墳～４号墳は墳丘背後の尾根に弧状の区画溝を巡らせ、盛土によって墳丘を形成する古墳である。これに対して５号墳は尾根を横切る直線的な区画溝を掘り、地山成形によって墳丘を形成する。古墳の主体部においては、１～４号墳は木棺直葬を主とし、５号墳は木棺直葬と小型竪穴式石室を持つ。古墳の時期は、３号墳、４号墳からは陶邑編年(2)のＴＫ10型式に併行する須恵器が出土している。５号墳では直接的に時期を特定できる遺物は出土していないが、主体部の形状などから４世紀末から５世紀前半ごろの古墳と考えられる。１号墳、２号墳は墳丘の築造方法から３号墳、４号墳に近い時期であろう。

このように、１～４号墳と５号墳の間には、墳丘の成形方法・形態、埋葬施設、時期などに明瞭な違いがある。同一尾根上の古墳群ではあるが、古墳の築造時期は大きく２時期に分けられる。

古墳以外の遺構としては、落とし穴と考えられるものを含む土坑を６基検出した。

〔註〕

(1) 山東町教育委員会『持谷古墳発掘調査報告書』1988
　５頁、第２図山東町の主要遺跡において、方谷古墳群一帯を古墳群として囲っている。

(2) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981

第２節　１号墳

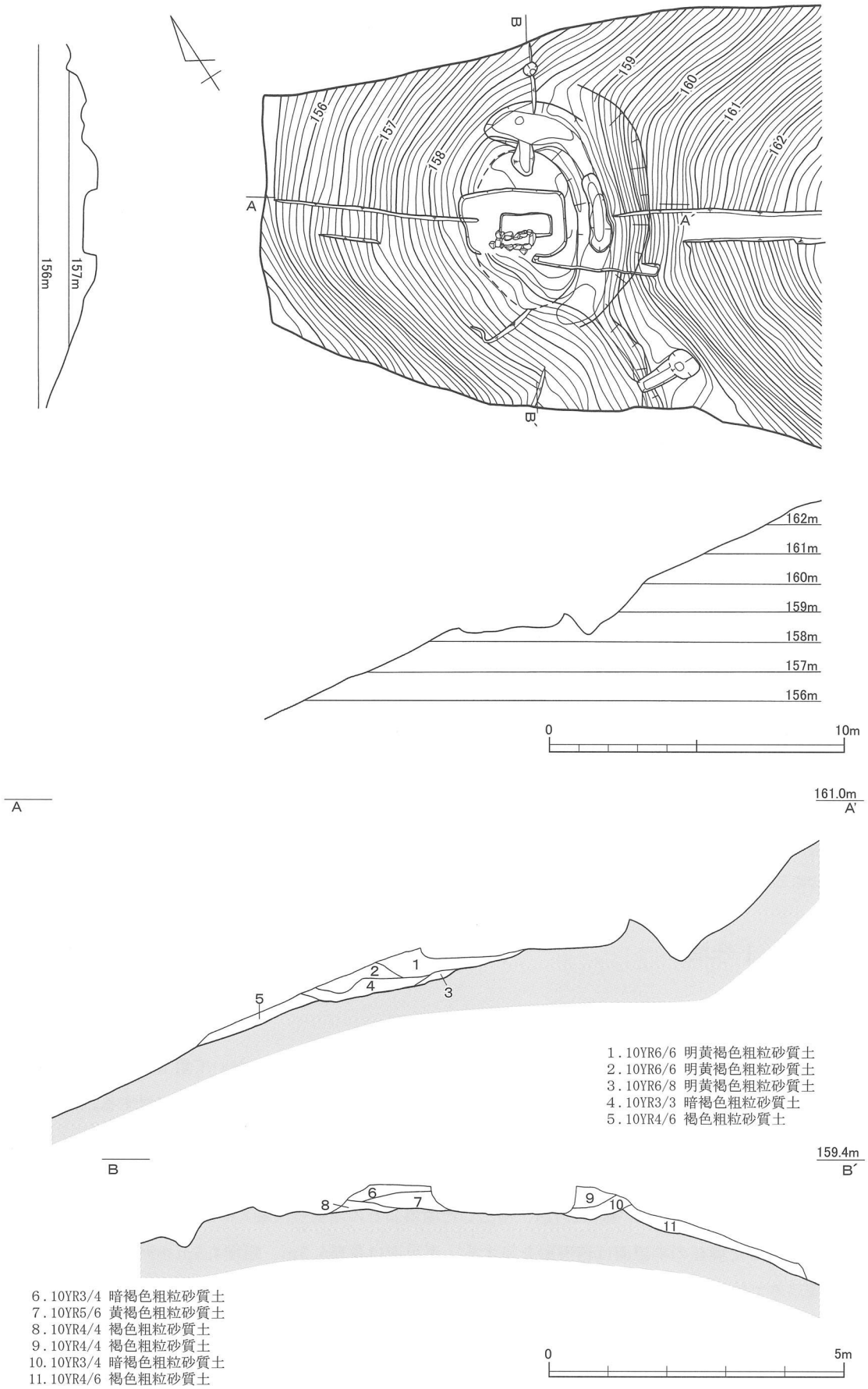
１．墳丘（第５図、写真図版２）

検出状況　尾根斜面の最も下に位置し、標高は159ｍである。確認調査において第２主体部の石棺が検出されていた。墳丘中央に第１主体部を検出し、少し南西にずれて第２主体部が位置する。尾根から削り出した平坦面に盛土することによって墳丘を構築している。

区画溝　墳丘背後に、斜面を大きく削った弧状の溝を掘り区画している。溝は墳丘の山側半分近くまで巡る。墳丘背後の最も広い幅は2.7ｍ、検出した墳頂面との高低差は最大60㎝を測る。

規模　検出した墳丘の平坦面は楕円形を呈する。平坦面は長径5.3ｍ、短径3.5ｍを測る。墳丘の裾は区画溝以外では明確ではない。

埋葬施設　墳頂部で２基の埋葬施設を検出した。第１主体部は木棺、第２主体部は石棺を埋葬施設とする。これら主体部の主軸は、尾根の主軸に平行している。第１主体部と第２主体部には切り合い関係があり、第２主体部のほうが新しい。


156m
157m
A
A'
B
B'
156
157
158
159
160
161
162
162m
161m
160m
159m
158m
157m
156m
0
10m
161.0m
A'
A
1
2
3
4
5
1.10YR6/6 明黄褐色粗粒砂質土
2.10YR6/6 明黄褐色粗粒砂質土
3.10YR6/8 明黄褐色粗粒砂質土
4.10YR3/3 暗褐色粗粒砂質土
5.10YR4/6 褐色粗粒砂質土
159.4m
B'
B
6
7
8
9
10
11
6.10YR3/4 暗褐色粗粒砂質土
7.10YR5/6 黄褐色粗粒砂質土
8.10YR4/4 褐色粗粒砂質土
9.10YR4/4 褐色粗粒砂質土
10.10YR3/4 暗褐色粗粒砂質土
11.10YR4/6 褐色粗粒砂質土
0
5m

第５図　１号墳平面・断面

出土遺物　墳丘上、盛土内などから遺物の出土はない。

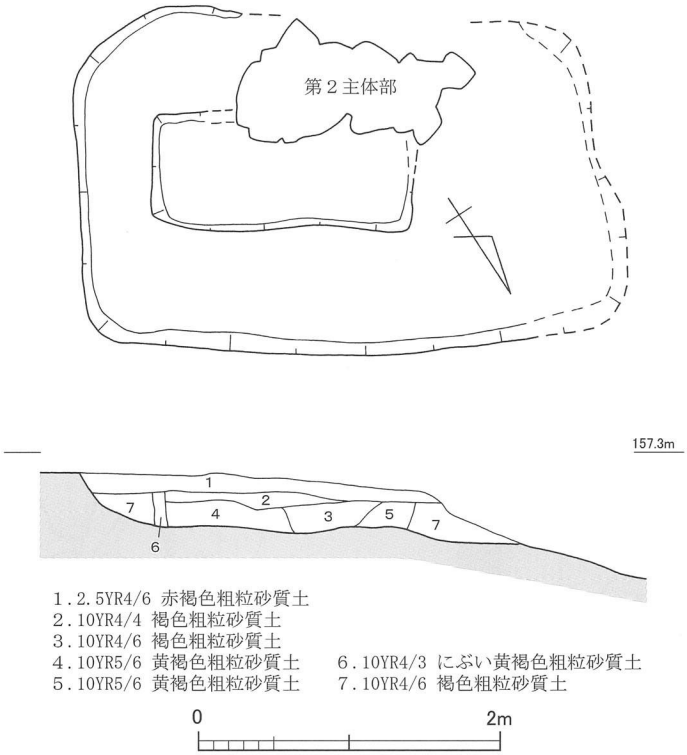
時期　墳丘の形態や他の古墳との関係から、６世紀代と考えられる。

２．第１主体部（第６図、写真図版２）

検出状況　墳頂部中央で検出した。第２主体部とは切り合い関係にあり、第２主体部に切られている。このため、墓壙と木棺の一部が破壊されている。さらに、墓壙は盛り土の流出によって西側部分が崩れている。

墓壙　平面形は隅丸の長方形を呈し、主軸方向は尾根の主軸と平行する。検出した規模は、主軸方向で3.52m、その直交方向で2.24m、深さ34cmを測る。墓壙の底はほぼ平坦である。

木棺　検出した木棺は長さ1.72m、幅78cm、棺中央部で深さ24cmを測る。主軸方向の断面観察から厚さ８cmほどの棺材の痕跡が確認できた。棺の内法は、これら棺材の厚みを引いて、長さ1.56m、幅62cm程度であったと考えられる。棺の横断面は箱形を呈する。棺底部はほぼ水平な平坦面をなす。



第６図　１号墳第１主体部

出土遺物　棺内および墓壙内から遺物の出土はない。

時期　年代は不明である。

３．第２主体部（第７図、写真図版２）

検出状況　墳頂部中央で検出した。第１主体部とは切り合い関係にあり、第１主体部を切っている。石棺の一部は調査前に露呈していた。

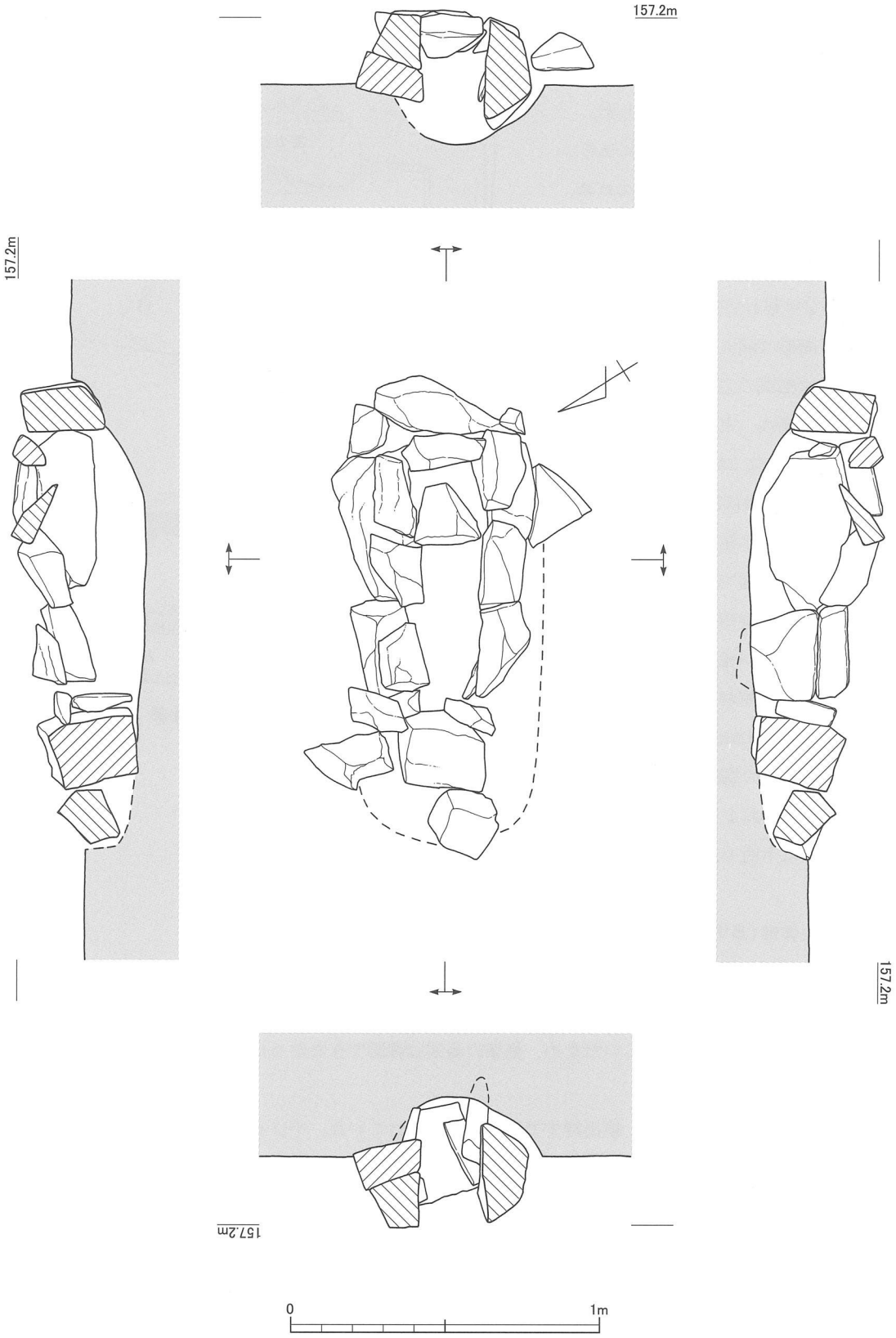
墓壙　検出時に石棺が露呈していたため、墓壙の範囲は確認できなかった。石棺が収まる程度の墓壙であったと考えられる。

石棺　組合式箱式石棺である。検出時すでに蓋石は失われていた。小口石底部における主軸方向の長さは92cmを測り、崩壊による影響が少ないと考えられる東小口の幅は20cmである。

長側石は両側とも２石からなり、部分的に２段に積まれる。小口石は両側とも１石からなる。墳丘の崩壊により石棺も西側に崩れ石材間の隙間が目立つ。

出土遺物　棺内から遺物の出土はない。

時期　年代は不明である。



第７図　１号墳第２主体部

第３節　２号墳

１．墳丘（第９図、写真図版３）

検出状況　１号墳の南東側、３号墳より西方向へ伸びる尾根が、北西方向へと向きを変える標高164.5ｍの地点に位置する。調査前において広い平坦面を確認できた場所である。すでに盛土が流出していたため、現表土を除去した時点で主体部の棺底がわずかに残っている状況であった。尾根から削り出した平坦面に盛土することによって墳丘を構築している。

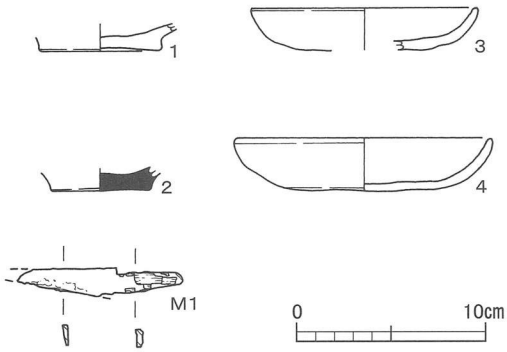
区画溝　墳丘背後の尾根を切るように、弧状の溝を掘り墳丘を区画している。溝は検出した平坦面から10cmほどの深さであり、深く地山を掘り込んでいない。平坦面を確保するために尾根を削り出したためと考えられ、区画溝は墳丘背後のみである。溝が埋没した後にはＳＫ０１が掘られている。

規模　検出した墳丘の平坦面は楕円形を呈す。盛土の流出が激しく、明確な規模は不明である。検出した平坦面は、長径9.25ｍ、短径９ｍを測る。平坦面は９ｍ前後の円形をしていたと考えられる。この範囲に盛土がなされていたとすると、今回検出した古墳の墳丘規模では最大となる。

貼り石　墳丘西裾で、大きさが20cm～40cm前後の自然石８石が並んでいるのを検出した。これらは墳丘裾に並べられていた可能性が考えられる。

埋葬施設　墳丘中央から区画溝側に近い位置に木棺１基を検出した。主体部の主軸方向は、尾根の主軸に直交する。

出土遺物　**（第８図、写真図版11）**　区画溝埋土上面から黒色土器（１）、須恵器椀（２）、土師器皿（３）、（４）が出土した。黒色土器（１）は、底部を回転糸切り後ナデで仕上げる。須恵器椀（２）は、底部を回転糸切り後ナデで仕上げる。土師器皿（３）、（４）はいずれも手づくねで成形後ナデで仕上げる。（４）は口縁端部外面に強い横ナデを施し、口縁端部が内傾する。



第８図　２号墳出土遺物

時期　出土遺物や墳丘の形態、他の古墳との関係から、６世紀中頃と考えられる。

２．主体部（第９図、写真図版３）

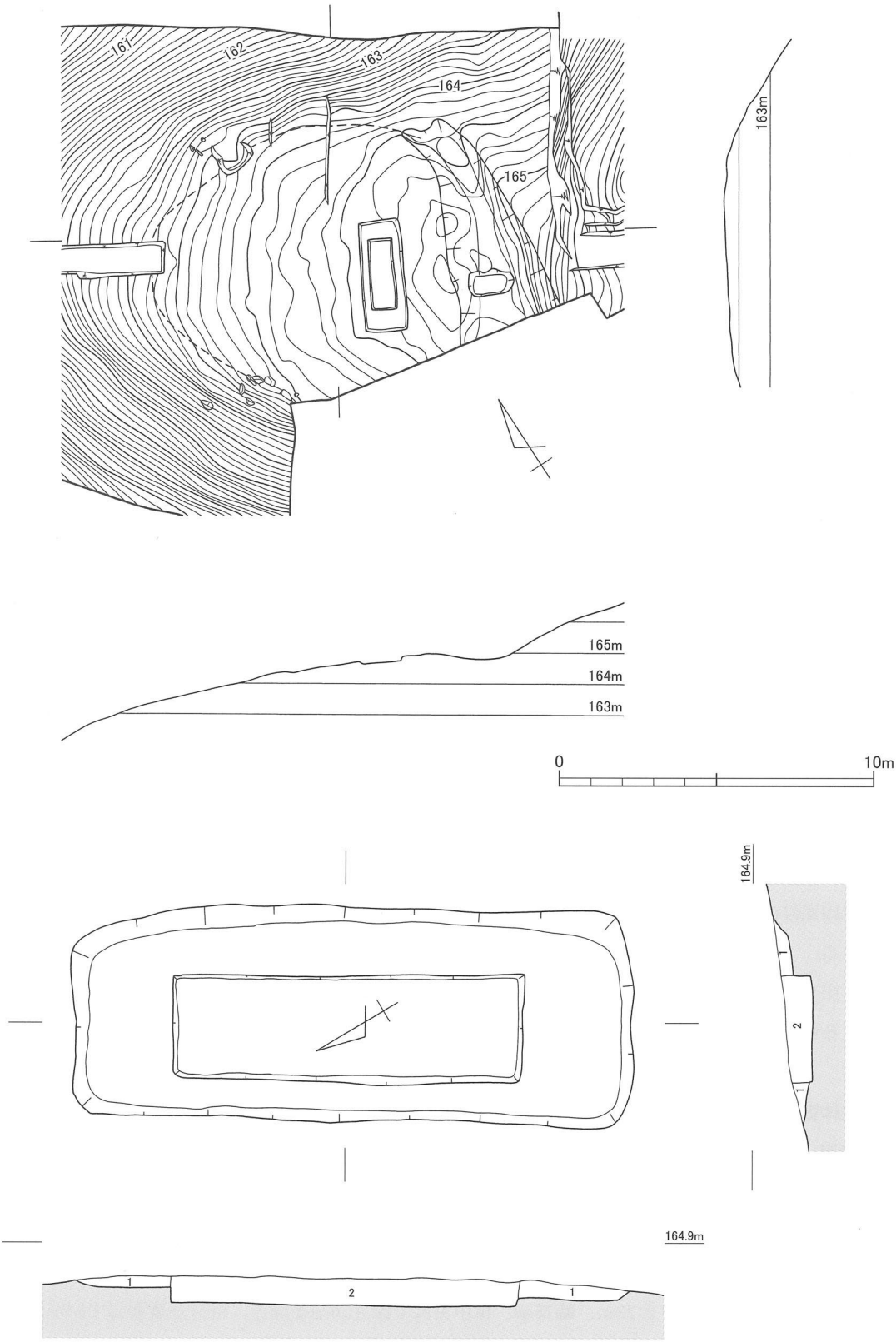
検出状況　表土を除去した時点で、主体部の平面形を検出した。墳丘盛土の流出、削平により、主体部はわずかに残存していたにすぎない。

墓壙　平面形は隅丸の長方形を呈し、主軸方向は尾根の主軸と直交する。検出した規模は、主軸方向で3.53ｍ、その直交方向で1.38ｍ、深さ24cmを測る。墓壙の底は棺部分が一段下がっている。

木棺　検出した木棺は長さ2.23ｍ、幅75cm、棺中央部で深さ16cmを測る。棺材は遺存していなかった。棺の横断面は箱形を呈する。棺底部はほぼ水平な平坦面をなす。

出土遺物　（第８図、写真図版11）墓壙埋土中から刀子（Ｍ１）が出土した。刀身の一部が欠損している。関は両関であるが、研ぎ減りにより刃側の関が欠損する。茎には木質が残っている。

時期　６世紀代と考えられる。



1．7.5YR6/6 橙色細砂～中砂
2．7.5YR7/6 橙色細砂～中砂　地山土が少し混じる

第９図　２号墳平面・断面・主体部

第４節　３号墳

１．墳丘（第11図、写真図版４）

検出状況　２号墳の東側、４号墳より南西方向へ伸びる尾根が西方向へと向きを変える標高172.8mの地点に位置する。調査前において平坦面が確認できた場所である。尾根から削り出した平坦面に盛土することによって墳丘を構築している。

区画溝　墳丘背後に弧状の溝を掘り区画している。溝は墳丘背後の北西部分のみで、南側には伸びない。そのため墳丘はいびつな形となる。溝は、墳丘背後で最大幅3.4m、検出面からの深さ30cmを測る。

規模　検出した墳丘の平坦面はいびつな楕円形を呈す。尾根の主軸方向に７m、その直交方向に4.75mの幅を測る。盛土の流出が激しく、はっきりとした規模は不明である。

埋葬施設　墳丘中央より少し下方側に寄った位置に木棺１基を検出した。主体部の主軸方向は、尾根の主軸に直交する。

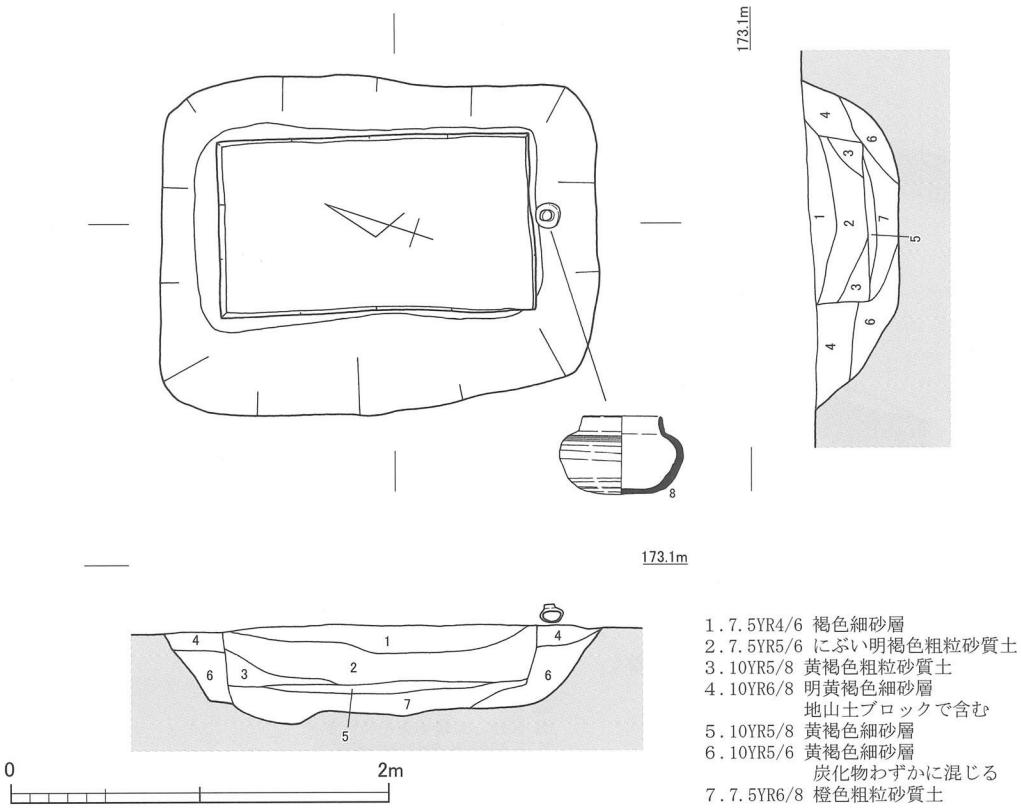
出土遺物（第13図、写真図版11）　区画溝上部から須恵器坏Ｂ（９）が出土した。（９）は、体部を直線的にのばし、口縁部がごくわずかに外反する。調整は回転ナデ。

時期　主体部出土の土器から判断して、６世紀中頃と考えられる。

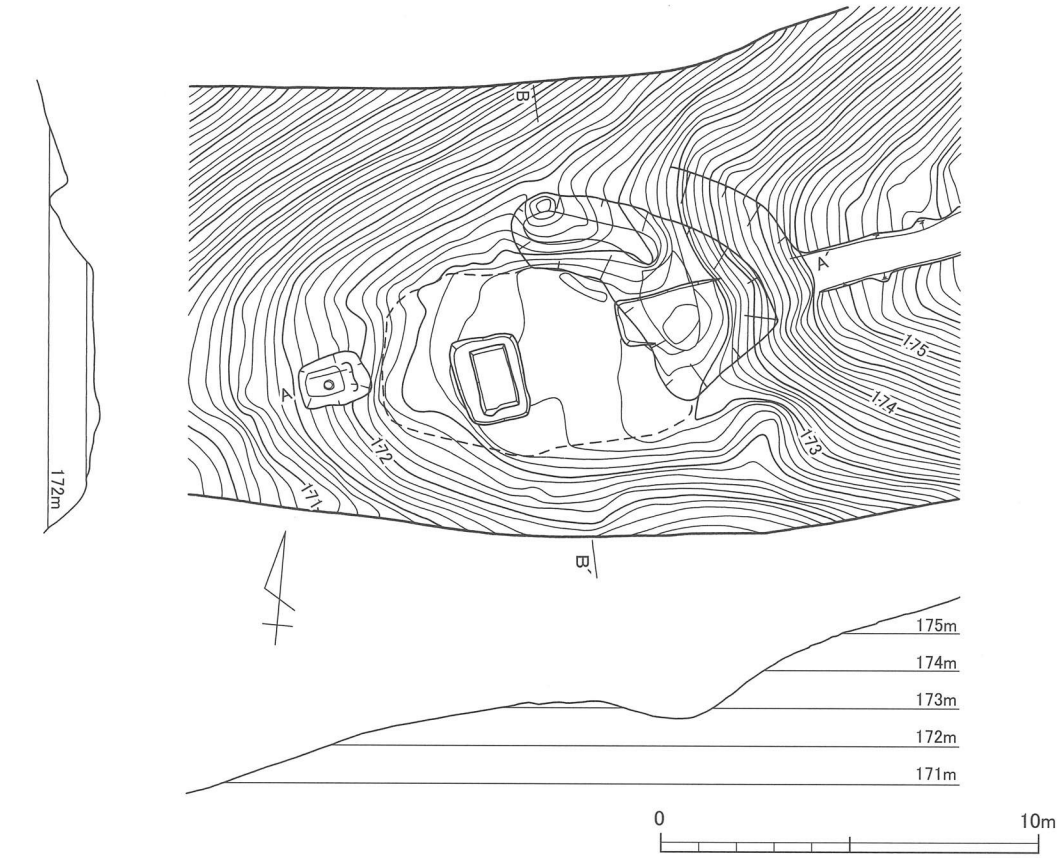
２．主体部（第10図、写真図版４）

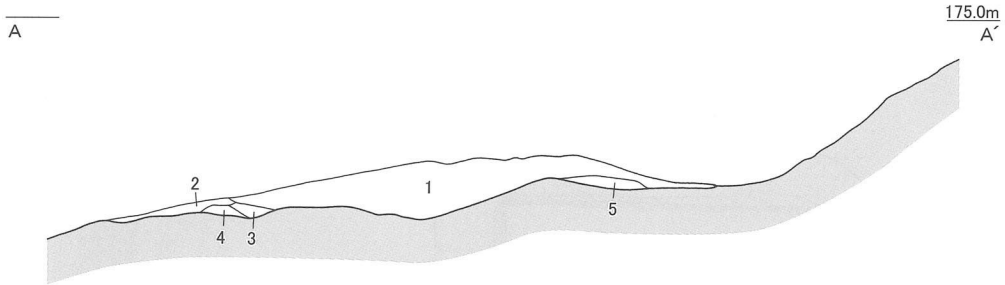
検出状況　表土を除去した時点で、主体部の平面形を検出した。

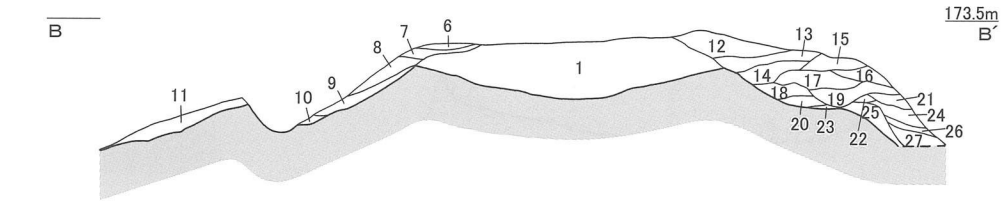
墓壙　平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向は尾根の主軸と直交する。検出した規模は、主軸方向で2.28m、その直交方向で1.79m、深さ42cmを測る。棺底と墓壙底の高さが一致しないため棺設置前に整



第10図　３号墳主体部







1．10YR5/8 黄褐色細～粗粒砂質土
2．10YR5/8 黄褐色粗粒砂質土
3．10YR5/6 黄褐色粗粒砂質土
4．10YR4/4 褐色粗粒砂質土
5．7.5YR5/8 明褐色粗粒砂質土（地山風化土）
6．10YR6/8 明黄褐色粗粒砂質土　しまり強い
7．10YR5/8 黄褐色粗粒砂質土　しまり強い
8．10YR5/6 黄褐色粗粒砂質土　しまり強い
9．10YR5/4 にぶい黄褐色粗粒砂質土　しまりなし
10．10YR6/6 明黄褐色粗粒砂質土　しまりなし
11．10YR4/6 褐色粗粒砂質土　しまりなし
12．10YR5/6 黄褐色粗粒砂質土
13．10YR5/6 黄褐色粗粒砂質土
14．10YR4/4 褐色砂質土
15．10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂質土
16．10YR5/6 黄褐色粗粒砂質土
17．10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂質土
18．10YR3/3 暗褐色粗粒砂質土
19．10YR4/2 灰黄褐色粗粒砂質土
20．10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂質土
21．7.5YR4/4 褐色粗粒砂質土
22．7.5YR4/3 褐色粗粒砂質土
23．10YR3/3 暗褐色粗粒砂質土
24．7.5YR4/6 褐色粗粒砂質土　地山土ブロックで含む
25．7.5YR4/6 褐色粗粒砂質土
26．10YR3/3 暗褐色粗粒砂質土
27．7.5YR4/6 褐色粗粒砂質土

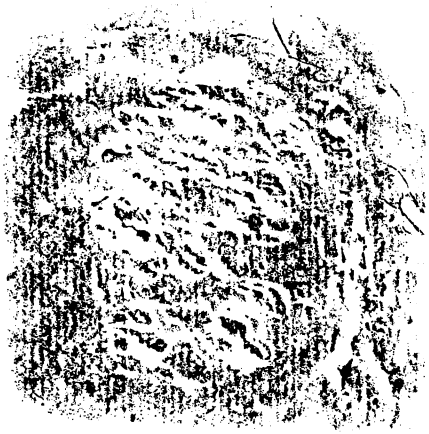
0　5m

第11図　３号墳平面・断面

地が行われたと考えられる。

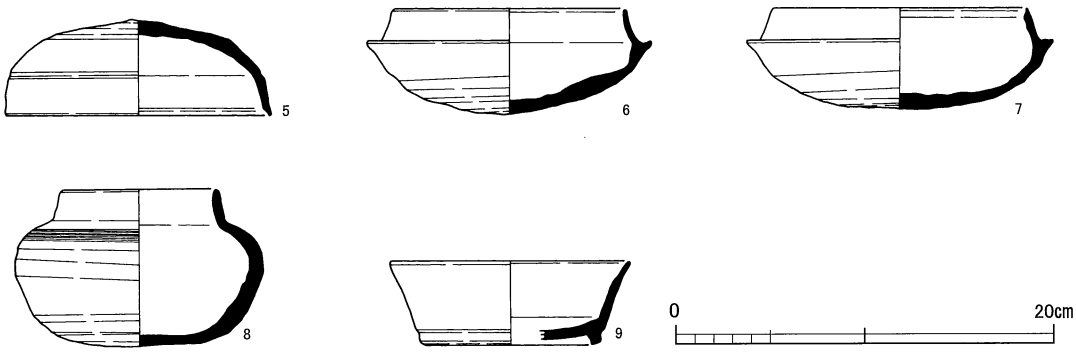
木棺　検出した木棺は長さ1.65m、幅93cm、深さ30cmを測る。棺材は遺存していなかった。棺の横断面は箱形を呈する。棺底部はほぼ水平な平坦面をなす。

出土遺物　**(第12・13図、写真図版11)**　墓壙上から須恵器坏蓋(5)・坏身(6)、(7)、短頸壷(8)が出土した。須恵器坏蓋(5)は、天井部外面に回転ヘラ削りを行い、肩部に凹線を施す。口縁端部はわずかに外に傾き、内面に段を持つ。須恵器坏身(6)、(7)は底部に回転ヘラ削りを行う。(6)は口縁端部を丸く収めるが、(7)は内側に段を持つ。短頸壷(8)は、底部に回転ヘラ削りを行い、体部は横ナデの後、肩部にカキ目を施す。底部内面に粗い布目状の痕跡がある。



第12図（８）内部の布目状痕跡

時期　出土土器から判断して６世紀中頃と考えられる。



第13図　３号墳出土土器

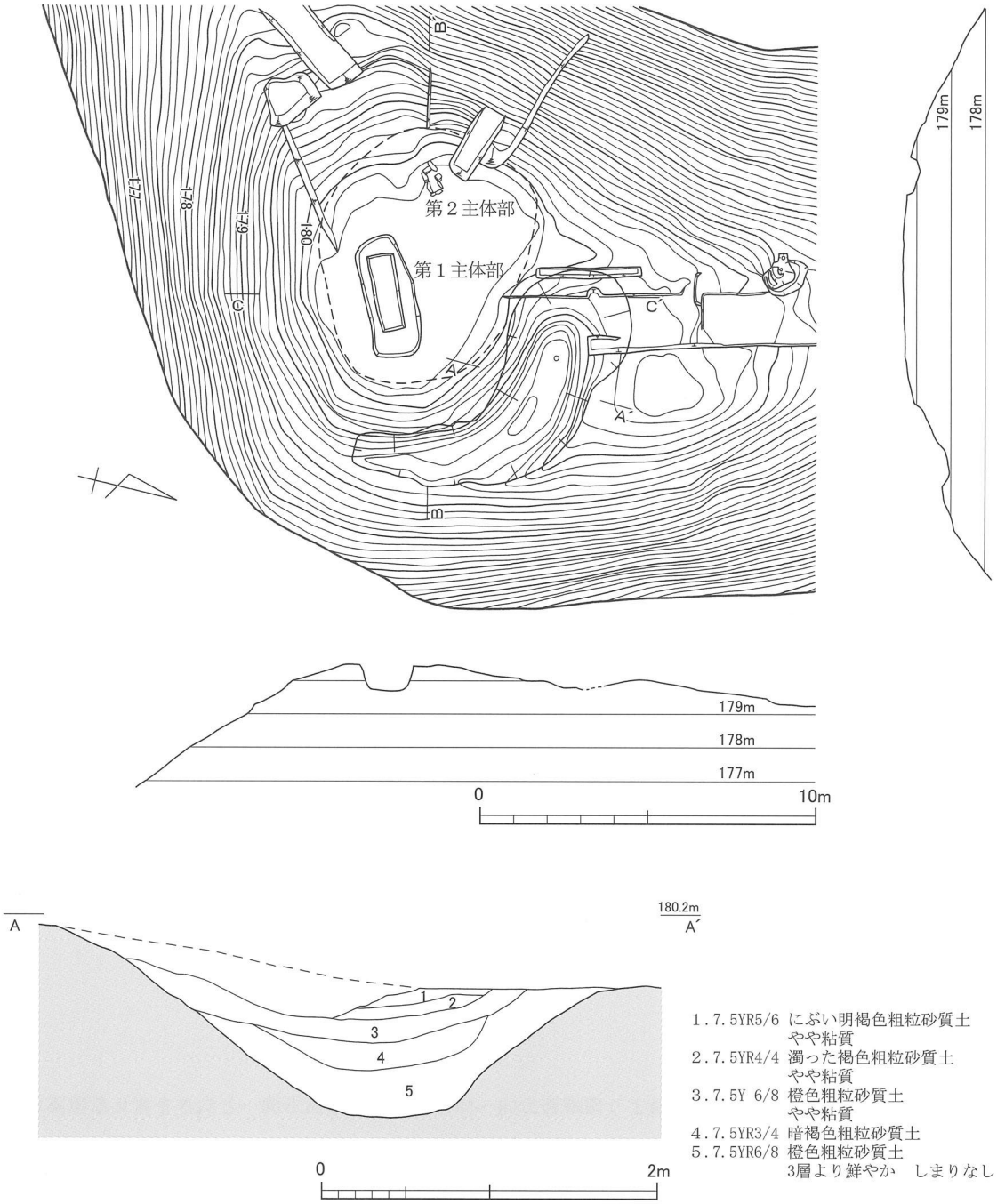
第５節　４号墳

１．墳丘(第14･15図、写真図版５)

検出状況　３号墳の北東側、５号墳より南南西方向へ伸びる尾根が南西方向へと向きを変える標高180mの地点に位置する。今回調査した尾根では最も高い場所となる。調査前から墳丘の高まりが確認でき、第２主体部の石棺が露呈していた地点である。墳丘は自然地形を利用し、区画溝と平坦面を削り出した後に盛土を行って構築している。今回調査した墳丘では盛土の残りが良い古墳であり、その厚さは墳頂部で20～50cmを測る。墳丘の北側、区画溝先端付近から須恵器坏蓋、坏身が出土した。須恵器は盛土が流出したため区画溝内に移動したと考えられる。

区画溝　墳丘の北から東へ幅3.4m、深さ最大80cmの区画溝が掘られている。溝は、北側部分が最も深く、東に行くに従い浅くなる。墳丘の南側は急斜面となっており、おそらく斜面の崩落があったと考えられ、明確な溝や墳丘の裾は確認できない。墳丘の南西側、３号墳へと伸びる尾根上に区画溝はない。溝の埋土４層から須恵器坏蓋(12)、坏身(13)が離れた位置で出土している。

規模　墳丘は区画溝によって円形に近い形となっている。墳丘の裾が明確なのは、区画溝の部分だけであり、それ以外においては断面で確認した盛土の範囲が墳丘と考えられる。しかし、墳丘盛土が流

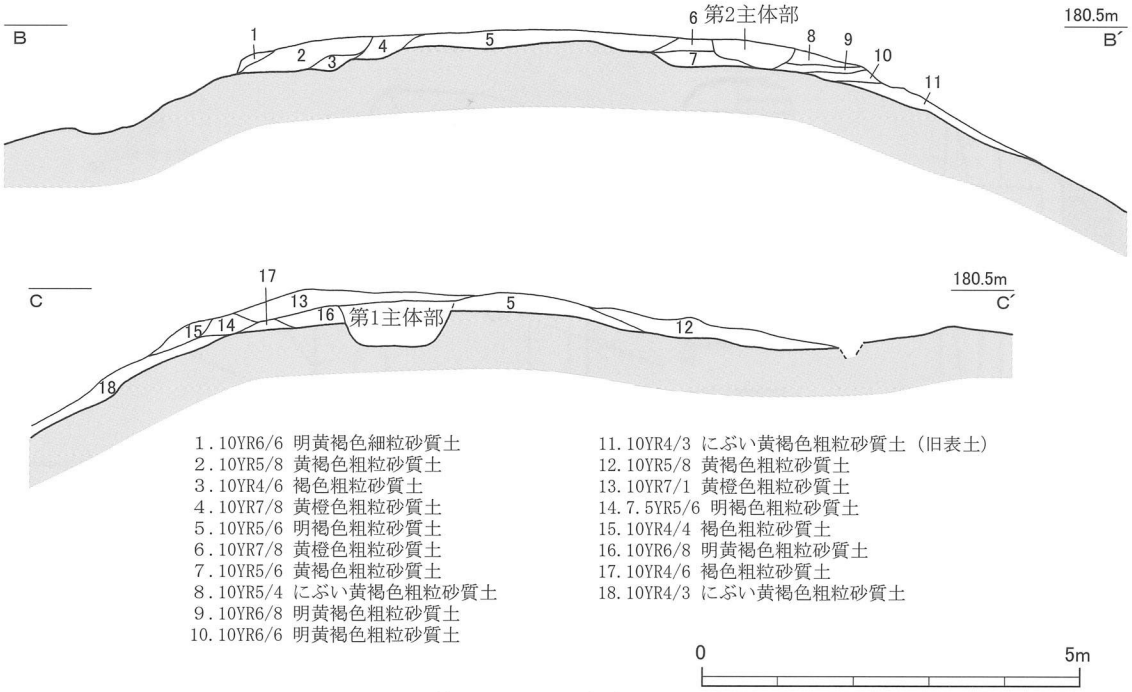


第14図　４号墳平面・断面

出しているため、明確な範囲は不明である。墳丘の裾が明確な東側の区画溝から第１主体部の主軸方向で最大8.7m、それに直交する方向で最大7.2mを測る。

埋葬施設　平坦面で２基の埋葬施設を検出した。第１主体部は木棺、第２主体部は石棺を埋葬施設とする。これら主体部の主軸方向は、１号墳から４号墳へと続く尾根の主軸にほぼ平行する。

出土遺物(第16図、写真図版12)　墳丘上から須恵器坏蓋(10)、須恵器坏身(11)が、溝埋土から須恵器坏



第15図　４号墳墳丘断面

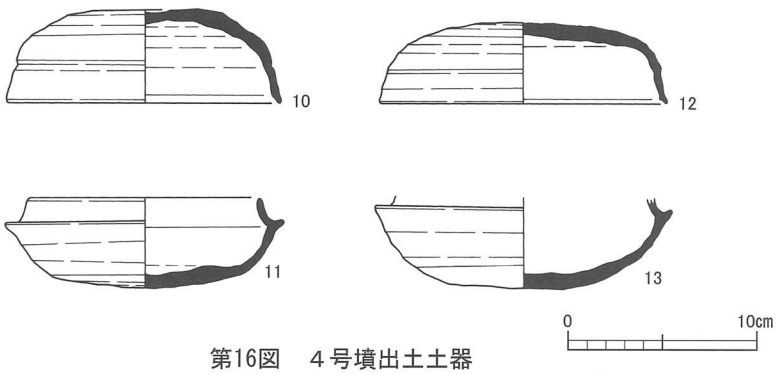
蓋(12)、須恵器坏身(13)が出土した。坏蓋(10)、(12)はいずれも天井部外面に回転ヘラ削りを行い、肩部に凹線を施す。口縁端部内面に段を持つが、(10)は明瞭さに欠ける。坏身(11)は底部に回転ヘラ削りを行う。(13)は底部に回転ヘラ削りを行った後、さらに不定方向のヘラ削りを施し成形する。

時期　出土土器から判断して６世紀中頃と考えられる。

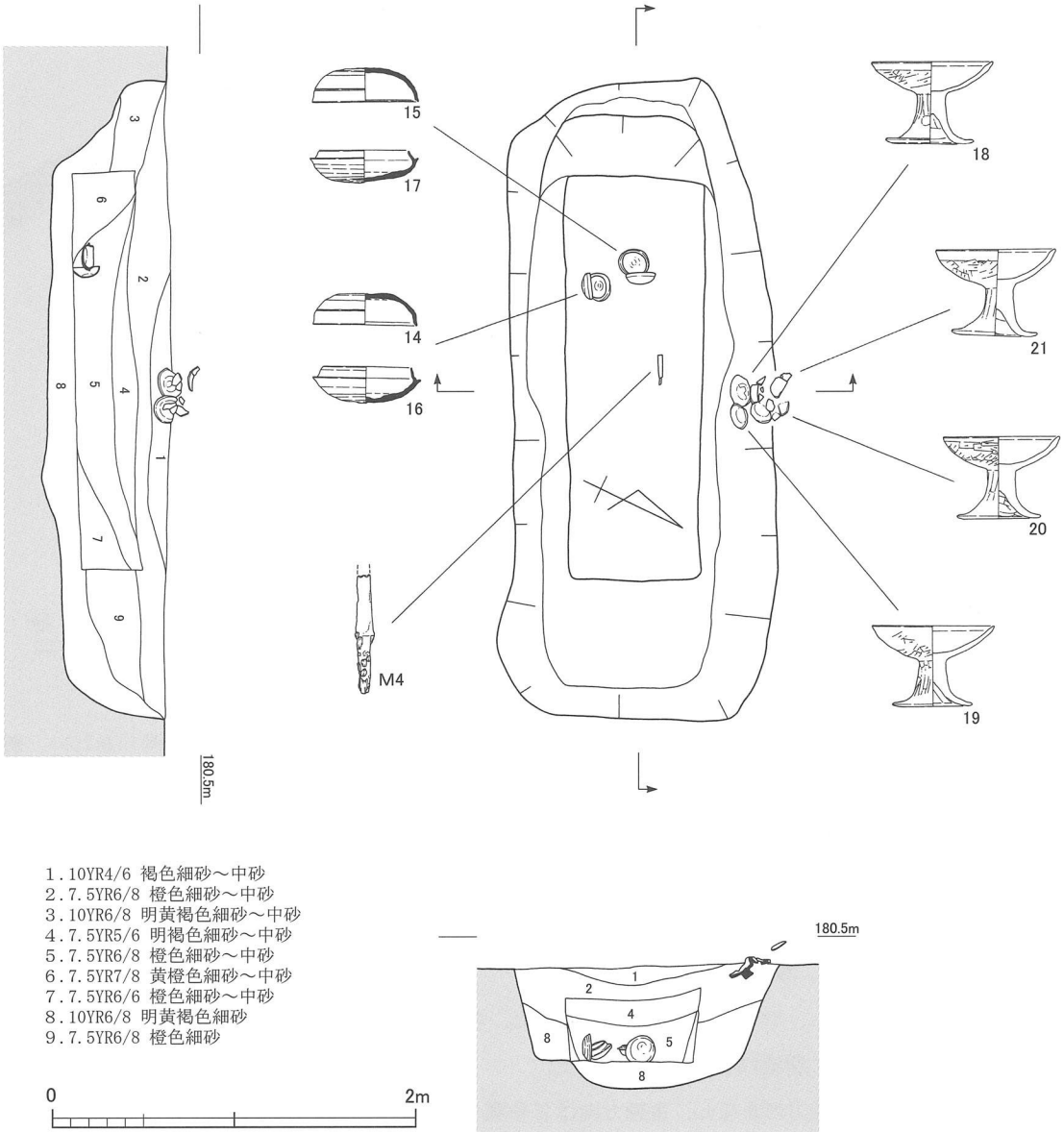
２．第１主体部(第17図、写真図版５・６)

検出状況　墳丘中央から、やや南東の位置で検出した。現表土除去後すぐ、墓壙上に置かれた土師器高坏が出土し、その周囲に墓壙の平面形を検出した。

墓壙　平面形は隅丸の長方形を呈し、主軸方向は３号墳へと伸びる尾根の主軸とほぼ平行する。検出した規模は、主軸方向で3.5m、その直交方向で1.35m、中央部で検出面からの深さ66cmを測る。墓壙西側は２段に掘られ、墓壙の横断面は極ゆるい弧状を呈する。主軸方向では墓壙底部のレベルは水平である。棺底部と墓壙底部の高さが一致しないため、棺設置前に整地が行われたと考えられる。



第16図　４号墳出土土器



第17図　4号墳第1主体部

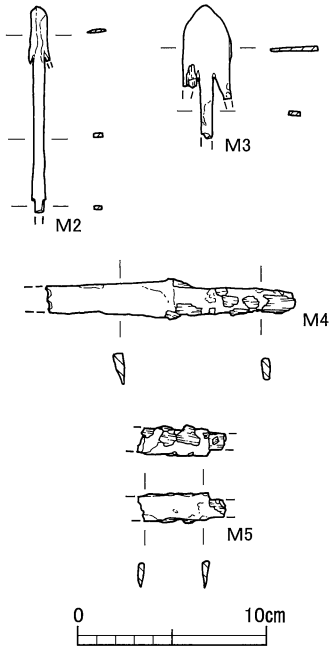
供献土器　墓壙上面の北側で、土師器高坏４点(18～21)が、坏部を棺側へ倒した状態で出土した。高坏は墓壙の陥没によって倒れており、本来は４点がまとまって立てられていたと考えられる。

木棺　検出した木棺は長さ2.2m、幅75cm、棺中央部で深さ40cmを測る。棺の横断面は箱形を呈する。棺底部はほぼ水平な平坦面をなす。棺底部には須恵器坏(14～17)がセットで２組置かれ、棺中央北側には刀子１点(Ｍ４)が刃先を西にして置かれている。坏のセットが置かれていた位置のほぼ真上、棺内埋土５層上面、４層との境から鉄鏃(Ｍ２)、刀子(Ｍ５)が出土している。出土状況から、これら２点は木棺の上に置かれていた可能性が考えられる。このように遺物の出土は棺西側に集中する。(Ｍ３)は棺内埋土からの出土であるが、出土位置は不明である。

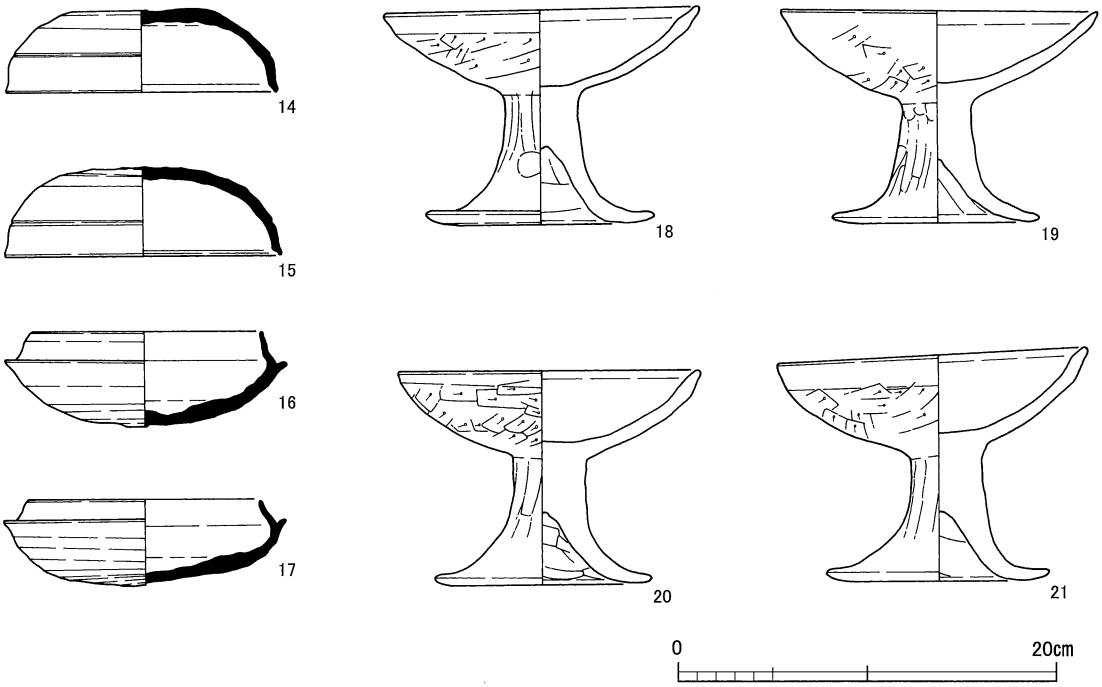
出土遺物(第18・19図、写真図版12・13)　墓壙上面から土師器高坏(18)、(19)、(20)、(21)、木棺内から須恵器坏蓋(14)、(15)、坏身(16)、(17)、鉄鏃(Ｍ２)、(Ｍ３)、刀子(Ｍ４)、(Ｍ５)が出土した。高坏はいずれも、坏部外面にヘラ削りを施し、内面は横ナデで仕上げる。脚部外面は縦方向、内面は横方

向のヘラナデを行う。高坏口縁端部には４点とも坏部の外面に黒斑がある。さらに、(18)、(19)、(20)には脚底部に坏部と対面する位置に黒斑がある。須恵器坏蓋はいずれも天井部外面に回転ヘラ削りを行い、肩部に凹線を施す。坏身はいずれも底部に回転ヘラ削りを施す。(Ｍ２)は長頸鏃で残存する長さ10.8cm、保存処理後の重さ4.4ｇ。鏃身部の断面はレンズ形、茎部がわずかに残る。(Ｍ３)は類柳葉系の腸抉三角形鏃であり、刃部は先端に向かい薄くなる。逆刺部には木質が付着する。残存する長さ７cm、最大幅2.5cm、保存処理後の重さ6.4ｇを測る。(Ｍ４)は茎に木質が残る。刃先が欠損しており、残存長で13.2cmを測る。(Ｍ５)は刀子の茎から身にかけての部分である。残存する長さ4.6cm、最大幅1.6cmを測る。刀子表面には木質が部分的に残る。断面は鋭角三角形である。

時期　出土土器から判断して６世紀中頃と考えられる。



第18図　第１主体部出土鉄器

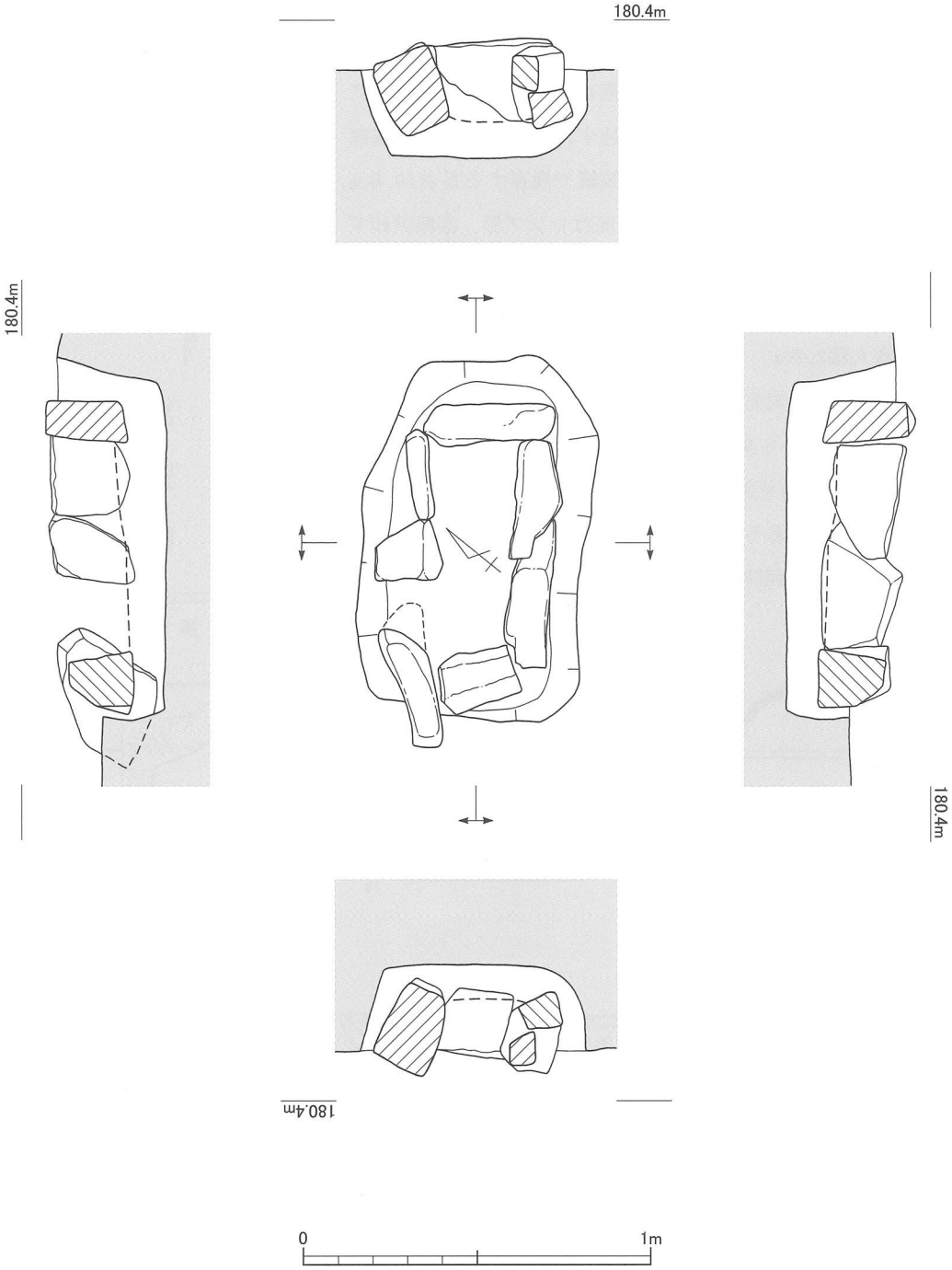


第19図　第１主体部出土土器

３．第２主体部(第20図、写真図版６)

検出状況　石棺は調査前にすでに露呈しており、北側の長側石１石が原位置から南西方向へずれている。古くから棺の蓋が失われていたため、棺内埋土は固くしまっている。

墓壙　平面形は石棺に沿った形をする。主軸方向は３号墳へと伸びる尾根の主軸とほぼ平行しているが、第１主体部の主軸とは14.5°北側へずれがある。検出した規模は、主軸方向で1.02m、その直交方向で63cm、中央部で検出面からの深さ32cmを測る。



第20図　４号墳第２主体部

石棺　組合式箱式石棺である。検出時に蓋石は失われていた。小口石底部における主軸方向の長さは60cmを測り、原位置にある東小口の幅は25cmである。長側石は北側が３石、南側は２石からなり、いずれも１段である。石の組み合わせ方として、東小口石は長側石を塞ぎ、西小口石は長測石に挟まれる作りとなる。ここから復元した西小口の幅は20cmとなり、25cmの東小口より狭くなる。

出土遺物　棺内から遺物の出土はなかった。

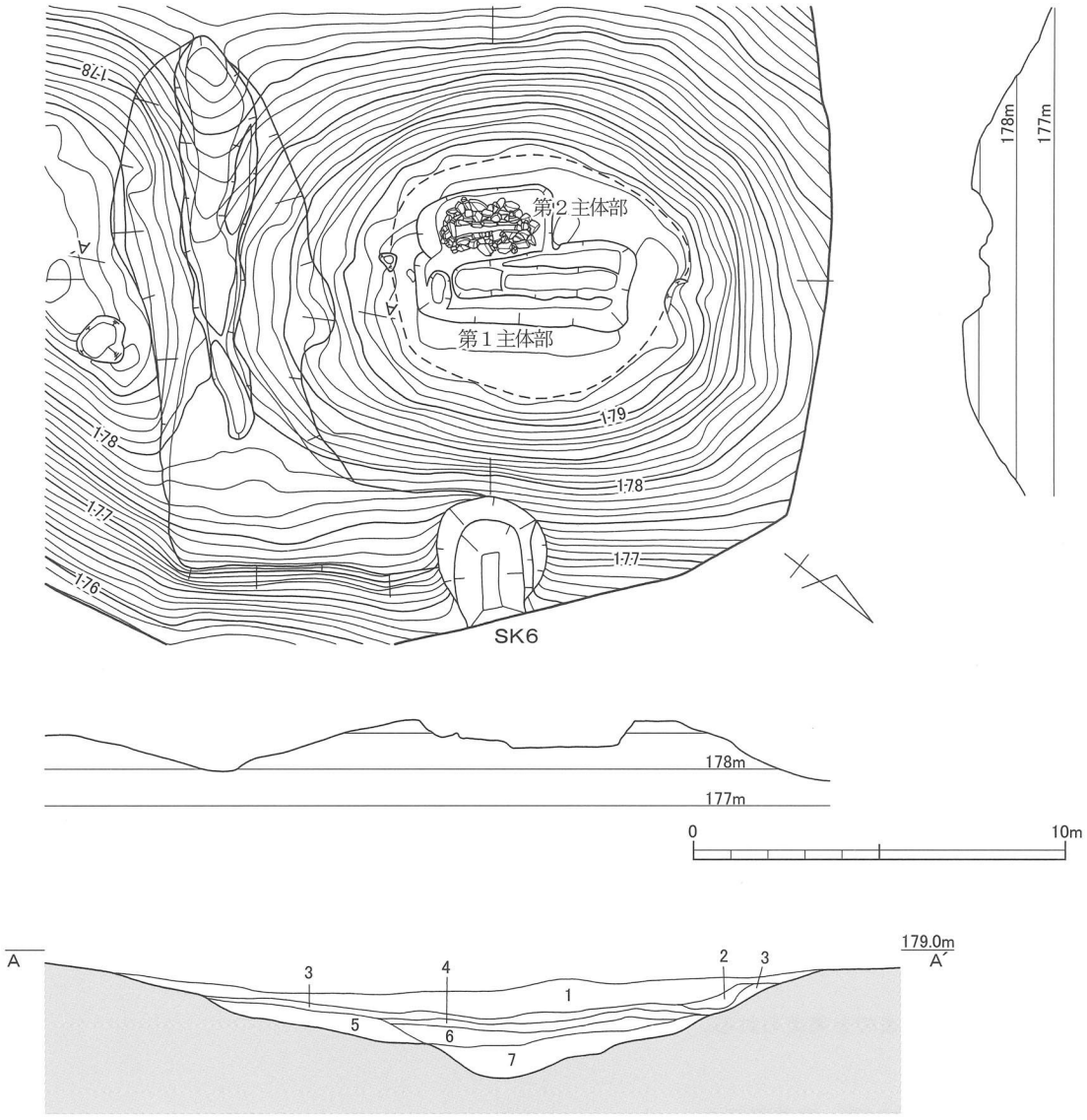
時期　年代は不明である。

第６節　５号墳

１．墳丘（第21図、写真図版７）

検出状況　４号墳の北側、調査区内の尾根最深部にあたる標高179.3ｍの地点に位置する。調査区外から南西方向へと伸びてきた尾根は、５号墳で南南西方向へ向きを変え４号墳へと続く。調査前から墳丘の高まり、区画溝の窪みが確認できた場所である。墳丘は自然地形を利用し、区画溝の掘削と地山の削り出しによって成形されている。墳丘東側には幅２ｍの平坦面が区画溝から墳丘沿いにＳＫ６まで続いている。この区画溝から続く平坦面は墳丘をL字に囲む。このことから墳形は方形を意識していると考えられる。

区画溝　墳丘の南側、尾根筋と直交方向に直線的に掘られている。稜線上で幅約５ｍ、検出面からの深さ70㎝を測る。溝の傾斜角度は墳丘側で約20°、４号墳側では10°～30°前後の傾斜となる。溝埋土７



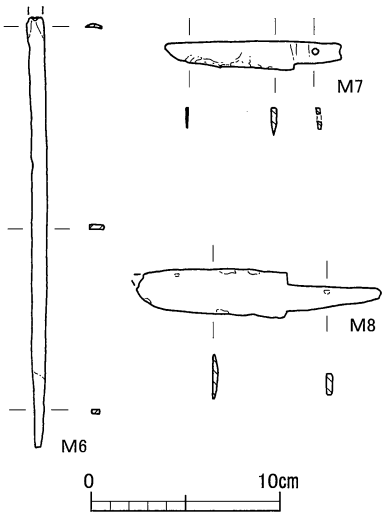
1．10YR6/6 明黄褐色細砂
2．7.5YR6/8 橙色細砂
3．7.5YR4/6 褐色細砂
4．7.5YR5/6 明褐色細砂
5．10YR4/6 褐色細砂
6．7.5YR6/8 橙色細砂
7．10YR6/8 明黄褐色細砂

第21図　５号墳平面・断面・溝断面

層部分は区画溝掘削後にえぐれた部分と考えられるため、５層、６層の下面が本来の溝底部であろう。溝の平面形は中央部がふくらんだ紡錘形になる。これは、墳丘南面を平面的に成形したためである。

規模　区画溝、平坦面以外では墳丘の裾が明確でないため墳丘の規模は不明である。仮に、区画溝底部である標高178mラインを墳丘裾とすると、墳丘の規模は主体部主軸方向10m、その直交方向14m、高さ1.3mとなる。検出した墳頂の平坦面は、主体部主軸方向で８m、その直交方向で6.5mを測る。

埋葬施設　平坦面で２基の埋葬施設を検出した。第１主体部は木棺、第２主体部は石棺を埋葬施設とする。これら主体部の主軸方向は５号墳へと続いてきた尾根の主軸方向と平行である。



第22図　５号墳出土鉄器

出土遺物(第22・29図、写真図版13)　墳丘の表土内から刀子(Ｍ８)が出土した。(Ｍ８)は片関で長さ12.8cm、最大幅2.6cmを測る。刃先を少し欠くがほぼ完形で出土した。また、墳丘上ではないが、ＳＫ６埋土上面から高坏 (22)、(23) が出土している。この高坏は５号墳に関連する遺物である可能性が高い。

時期　出土遺物や墳丘の形態などから、４世紀末から５世紀初頭と考えられる。

２．第１主体部(第23図、写真図版８)

検出状況　墳頂部中央に位置し、現表土除去後すぐに墓壙の平面形を検出した。

墓壙　不整形な隅丸長方形を呈し、主軸は尾根と平行する。主軸方向で5.58m、その直交方向で最大2.22m、墓壙中央で検出面からの深さ90cmを測る。墓壙中央の長さ３m、幅1.5mほどの部分が深さ30cmほどさらに深く掘られており、２段墓壙となる。２段目の横断面は極ゆるい弧状を呈する。主軸方向では底部のレベルは水平である。墓壙北側の両隅に小さな平坦面を１段ずつ検出した。これは、墓壙内への足掛けと考えられる。墓壙内南側に長径1.1m、短径54cmの楕円形を呈する土坑を検出したが、遺物の出土はなかった。埋土横断面において、墓壙を埋め戻した後に幅６cm程の棒状のものを40cm以上突き刺した痕跡を検出した。

木棺　木棺の痕跡を発見することができなかったため、棺の規模は不明である。

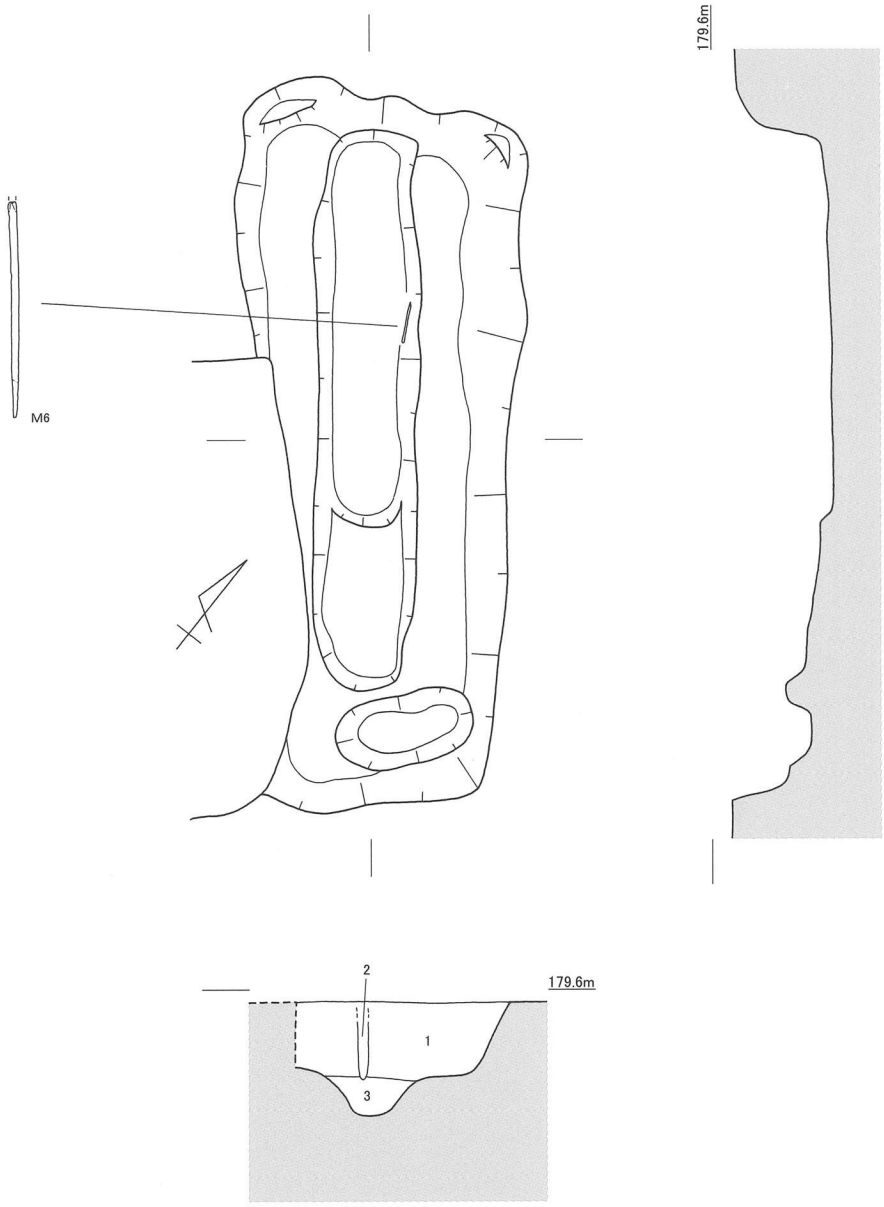
出土遺物(第22図、写真図版13)　墓壙内２段目の肩から鉇(Ｍ６)と、墓壙埋土中より刀子(Ｍ７)が出土した。(Ｍ６)は長さ22.6cm、最大幅0.9cmを測る。先端部を欠くが、それ以外の部分は良好に残存している。(Ｍ７)はほぼ完全な形で出土した。長さ9.25cm、最大幅1.6cmを測り、茎部分2.5cm、身部分6.75cm、茎には直径２mmの目釘孔がある。刃先部分の厚さが１mm程度であり、良く使用されたと考えられる。

時期　５世紀前半までと考えられる。

３．第２主体部(第24図、写真図版９)

検出状況　第１主体部の検出時に発見した。第１主体部を避けて築かれている。

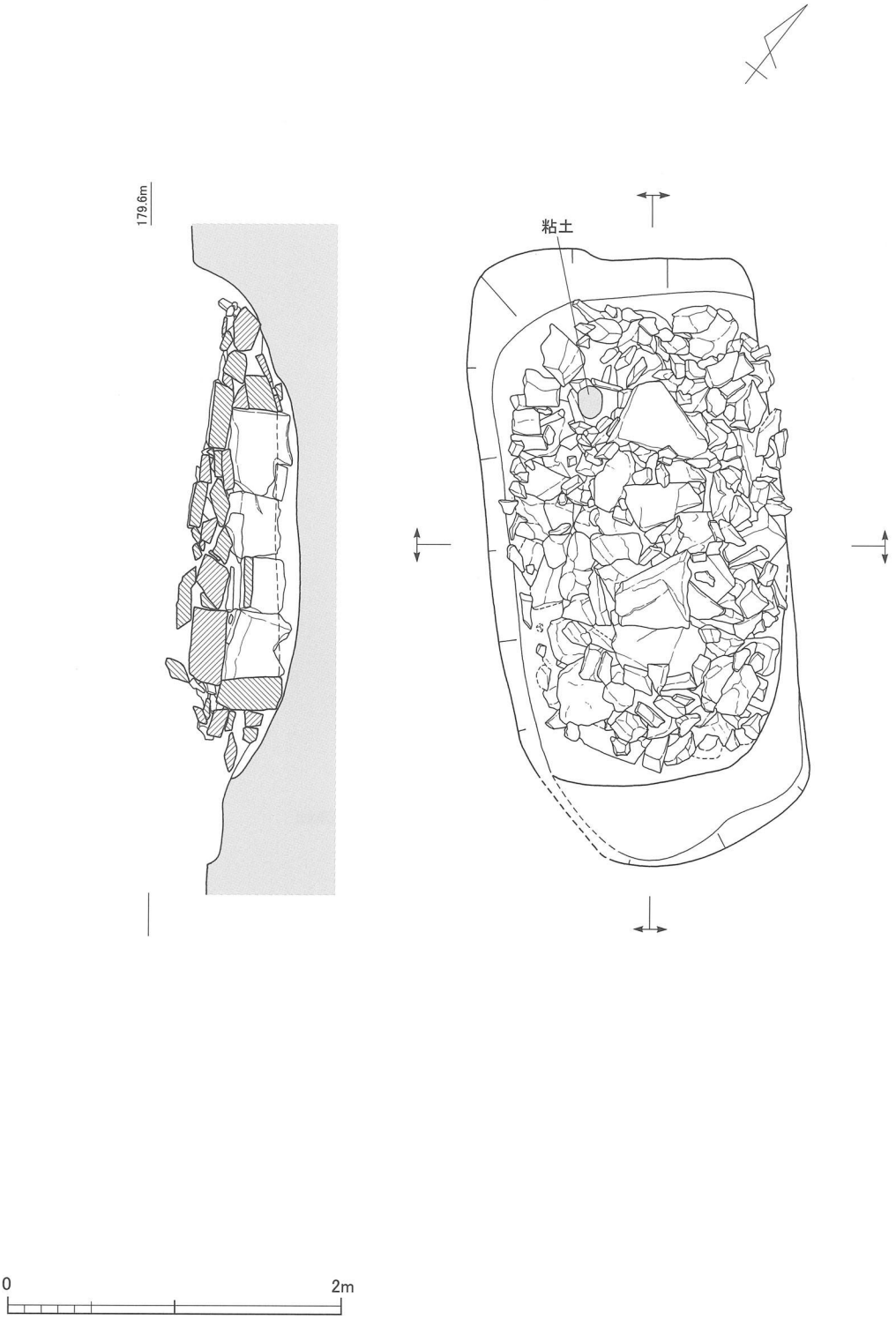
墓壙　隅丸長方形を呈し、主軸は尾根および第１主体部主軸と平行する。主軸方向3.64m、その直交方向で1.78m、墓壙中央で検出面からの深さ58cmを測る。



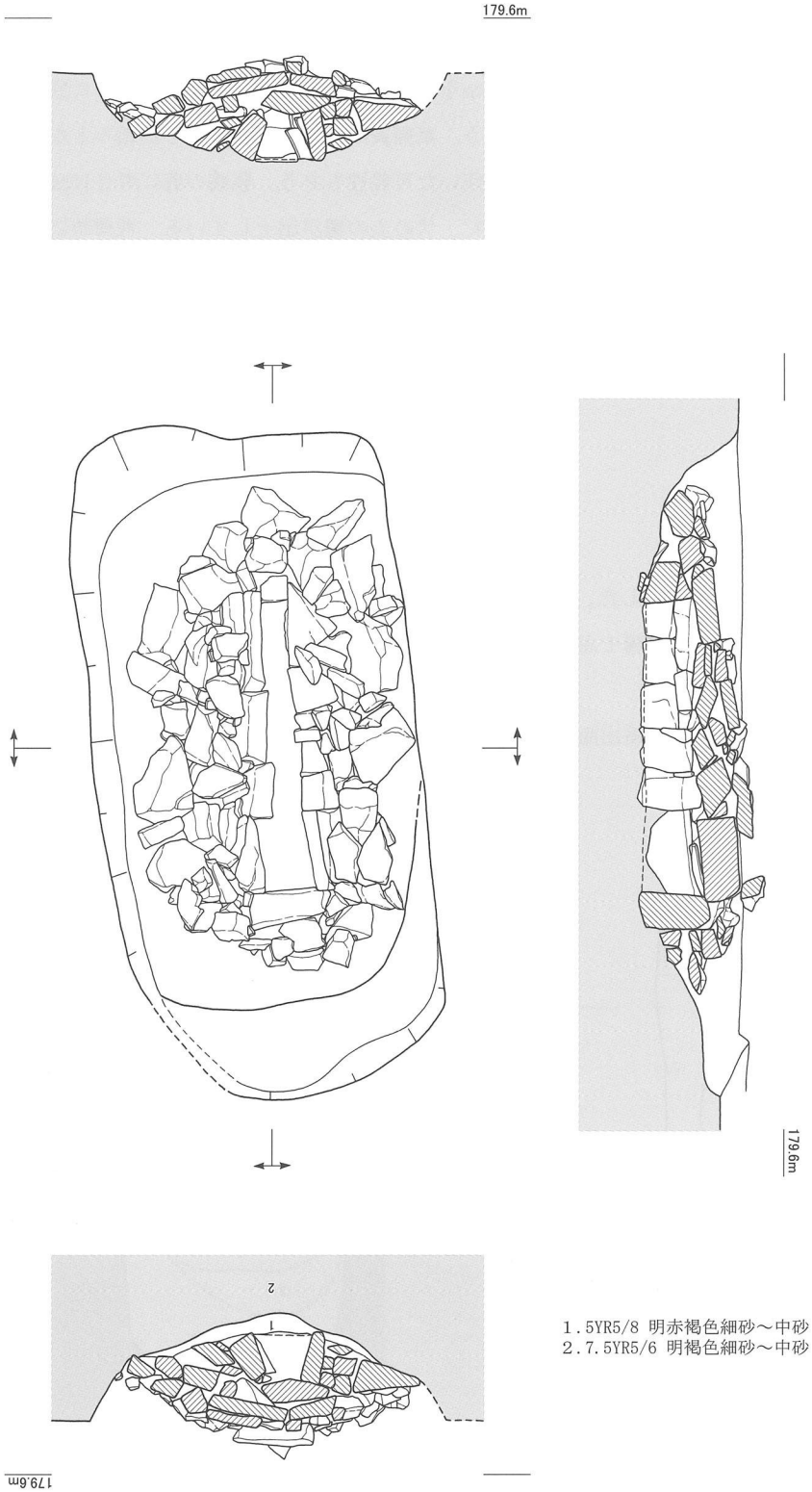
1．7.5YR6/8 橙色細砂～中砂
2．7.5YR6/8 橙色細砂～中砂
3．5YR6/8 橙色細砂～中砂

0 2m

第23図　５号墳第１主体部



第24図　５号墳第２主体部



1.5YR5/8 明赤褐色細砂～中砂　やや粘質
2.7.5YR5/6 明褐色細砂～中砂

第24図　５号墳第２主体部

小竪穴式石室　石室は組合式の箱式石棺の壁体上に大きめの蓋石を置き、その周囲および上面の一部に割石を積み上げて構築する。棺の周囲にも割石を充填し、上面観が竪穴式石室と似たものになる。積み石の隙間から粘土を検出したが、極少量であるため人為的なものかどうかは不明である。

石棺の小口石底部における主軸方向の長さは1.57cmを測り、南小口底の幅は40cm、北小口底の幅は25cmである。長側石は、西側で４石、東側で６石を使う。東側長測石では部分的に２段積みとなる。棺の横断面は台形を呈するが、棺構築後に側石が内側に傾いた可能性もある。墓壙の底に厚さ10cmほど土を敷き、石棺が据えられる。棺内埋土から緑色をした粘土状の土の塊が出土している。埋葬時に棺内へまいた可能性がある。棺に礫床はなく、棺底の土は地山や埋土よりやや赤みがかっていた。

出土遺物　棺内から遺物の出土はなかった。

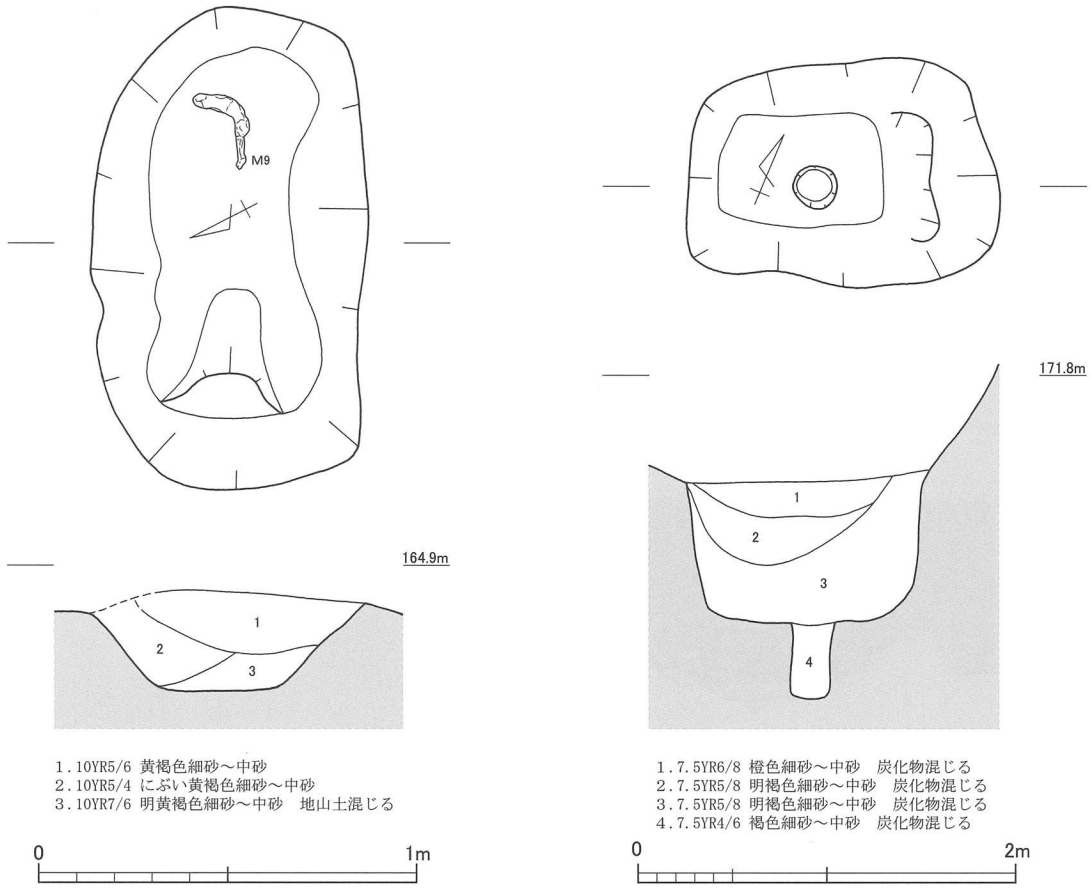
時期　５世紀前半までと考えられる。

第７節　土　坑

ＳＫ１（第25図、写真図版10）

検出状況　２号墳の区画溝内で検出した。標高164.5mの地点に位置する。土坑は区画溝埋土を切って掘られている。土坑底部東側から鉄鎌１点が出土した。土坑埋土の堆積状況から人為的に埋め戻されたと考えられる。

形態規模　長径1.27m、短径72cm、検出面からの深さ25cmの不整形な楕円形を呈す。土坑西側に若干浅

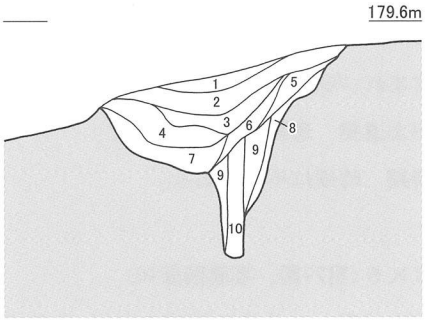


第25図　ＳＫ１・ＳＫ２

い部分があるが、土坑の底部はほぼ水平である。

出土遺物（第29図、写真図版13）　鉄鎌（Ｍ９）が出土した。（Ｍ9）は刃の先端を欠くが、それ以外はほぼ完形で出土した。長さ26.2cm、刃の最大幅3.4cm、厚さ３mmを測る。柄部の先端を折り曲げて着柄に備えている。

時期　12世紀～13世紀と考えられる。



1．盛土
2．10YR3/2 黒褐色中砂
3．10YR4/6 褐色中砂
4．7.5YR5/6 明褐色細砂～中砂
φ１cmの焼土塊が混じる
5．10YR4/6 褐色細砂～中砂
6．10YR4/4 褐色細砂～中砂
炭化物混じる
7．10YR6/8 明黄褐色細砂～中砂
8．7.5YR6/8 橙色細砂～中砂
炭化物わずかに混じる
9．10YR6/6 明黄褐色細砂～中砂
10．7.5YR5/6 明褐色細砂　炭化物混じる

0　1m

第26図　ＳＫ３

ＳＫ２（第25図、写真図版10）

検出状況　３号墳の西側、標高171.5mの地点に位置する。

形態規模　長辺1.6m、短辺1.2mの長方形を呈す。土坑底に杭のようなものを立てた小穴を持つ。土坑底部は平坦であり、小穴までの検出面からの深さは75cmを測る。小穴は直径20cm、深さ38cm。

出土遺物　遺物の出土はない。

時期　時期は不明である。

ＳＫ３（第26図、写真図版10）

検出状況　４号墳の北側、標高179mの地点に位置する。

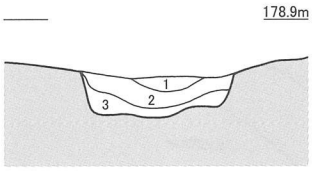
形態規模　直径1.3mの円形を呈す。土坑底に杭のようなものを立てた小穴を持つ。小穴までの検出面からの深さは40cmを測る。小穴は直径10cm前後、深さ60cm。断面観察から、小穴埋没後に再び掘削が行われていたことが確認できる。

出土遺物　遺物の出土はない。

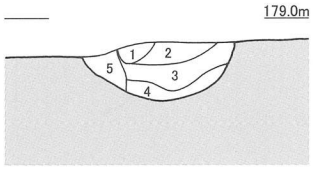
時期　時期は不明である。

ＳＫ４（第27図、写真図版10）

検出状況　５号墳区画溝の南側、標高178.8mの地点に位置する。



1．10YR4/4 褐色細砂～中砂
砂混じる
2．10YR4/1 褐灰色細砂～中砂
炭化物混じる　焼土塊混じる
3．7.5YR6/8 橙色細砂～中砂
炭化物混じる



1．10YR5/8 黄褐色細砂～中砂
2．10YR4/1 褐灰色細砂～中砂
炭化物混じる
3．10YR3/1 黒褐色細砂～中砂
炭化物多く混じる
4．7.5YR6/8 橙色細砂～中砂
炭化物混じる
5．10YR6/6 明黄褐色細砂～中砂

0　1m

第27図　ＳＫ４・ＳＫ５

形態規模　長径1.45m、短径１mの楕円形を呈し、検出面からの深さ21mを測る。埋土には焼土や炭化物が多く含まれ、内面が赤く焼ける。

出土遺物　遺物の出土はない。

時期　時期は不明である。

ＳＫ５（第27図、写真図版10）

検出状況　５号墳区画溝の南側、標高178.8mの地点に位置する。

形態規模　長径1.35m、短径85cmの楕円形を呈し、検出面からの深さ30cmを測る。埋土には焼土や炭化物が多く含まれ、内面が赤く焼ける。

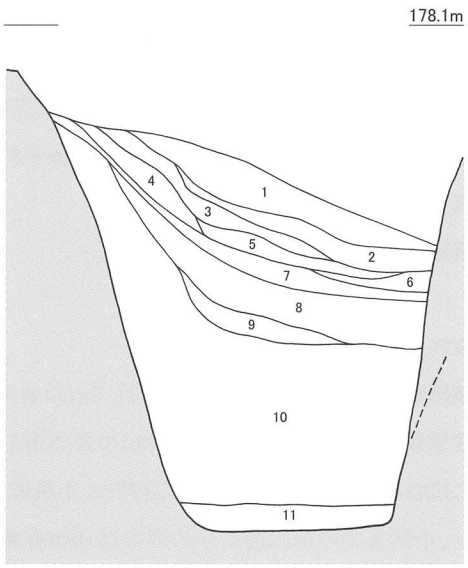
出土遺物　遺物の出土はない。

時期　時期は不明である。

ＳＫ６（第28図、写真図版10）

検出状況　５号墳の東側、調査区の境に検出した。土坑は調査区外東へとさらに伸びる。

形態規模　検出できた範囲は長径3.3m、短径2.9mの楕円形を呈する。検出面からの深さは３mを測り、今回検出した土坑の中で最も深い。上部は漏斗上、下部は垂直に掘削されている。底部は、平坦で、平面形は長方形である。



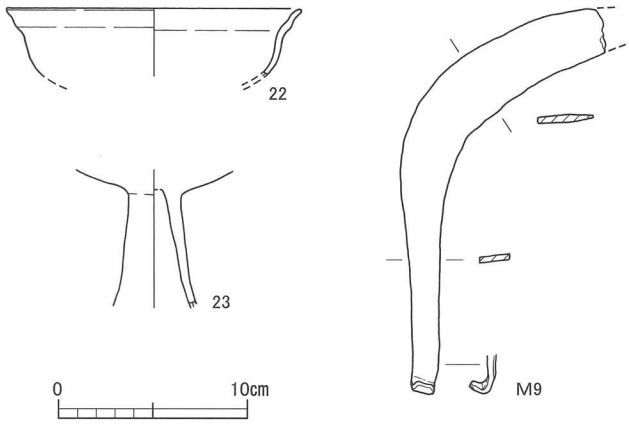
1.7.5YR6/8 橙色細砂
2.7.5YR5/6 明褐色細砂～中砂
3.10YR5/4 にぶい黄褐色細砂～中砂
4.7.5YR4/6 褐色細砂～中砂
5.10YR3/2 黒褐色細砂～中砂　炭化物多く混じる
6.10YR5/3 にぶい黄褐色細砂～中砂　地山風化土混じる
7.7.5YR6/8 橙色細砂～中砂
8.7.5YR6/8 橙色砂質土
9.7.5YR6/8 橙色砂質土
10.5YR5/8 明赤褐色砂質土　わずかに炭化物混じる
11.7.5YR5/8 明褐色粗砂～細砂

0　2m

第28図　ＳＫ６

出土遺物（第29図）　土坑埋土上面より高坏(22)、(23)が出土した。(22)は口縁部の破片である。口縁端部を外反させる。(23)は脚部破片である。摩滅が激しく調整は不明である。これら２点は、出土状況から５号墳から転落した遺物の可能性が高い。

時期　時期は不明である。



第29図　土坑出土遺物

第４章 総　括

（１）出土遺物について

土器

方谷古墳群から出土した遺物はごくわずかであり、出土のない古墳もある。そのなかで２号墳、３号墳、４号墳からは時期的考察を行える須恵器、土師器が出土した。これら遺物について考察を行う。

須恵器は２号墳、３号墳、４号墳から出土している。２号墳出土の須恵器（２）は古墳築造時期とは関係のない中世の須恵器椀底部であり、12世紀から13世紀のものと考えられる。３号墳の（５～７）、４号墳第１主体部出土の須恵器（14～17）はいずれも田辺編年におけるＭＴ10型式に平行すると考えられる。また、４号墳第１主体部上から出土した土師器高坏は供献土器と考えられるため、主体部出土の須恵器とほぼ同じ時期といえる。２号墳から出土した土師器皿（３）、（４）は制作手法から京都系の土師器と考えられる。同じ周溝から出土した須恵器椀底部と同様12世紀～13世紀頃といえる。

鉄製品

今回の調査で出土した鉄製品は、刀子、鉄鏃、鉋、鉄鎌である。その中で古墳の主体部から出土したものは刀子（Ｍ１）、（Ｍ４）、（Ｍ５）、鉄鏃（Ｍ２）、（Ｍ３）、鉋（Ｍ６）である。

刀子は２号墳主体部から（Ｍ１）、４号墳第１主体部から（Ｍ４）、（Ｍ５）、５号墳第１主体部から（Ｍ７）が出土している。（Ｍ１）、（Ｍ４）、（Ｍ５）は両関、（Ｍ７）は片関の刀子である。刀子を分類した魚津和克氏によれば、古墳時代中期（５世紀）までは片関が中心であり、中期末（５世紀末）以降に両関となる傾向が指摘されている。(1) 両関の刀子のうち（Ｍ４）、（Ｍ５）はＭＴ10型式の須恵器（14～17）、鉄鏃（Ｍ２）、（Ｍ３）と同じ棺内から出土している。鉄鏃は杉山秀宏氏の行った分類によると、（Ｍ２）が長頸鏃Ｂ形式第Ｖ形式、（Ｍ３）が腸抉三角形鏃Ａ形式Ａ類にあてはまる。(2) 須恵器、鉄鏃はいずれも６世紀中頃の遺物である。このことから（Ｍ４）、（Ｍ５）の時期は共伴する遺物と同じ６世紀中頃と考えられる。２号墳出土の（Ｍ１）、５号墳出土の（Ｍ７）は時期の決定に確実性を欠くが、（Ｍ１）は両関である点から５世紀末以降、（Ｍ７）は古墳主体部の小竪穴式石室の年代やＳＫ６出土の土師器などから４世紀末から５世紀初頭ごろのものと考えられる。

山東町に隣接する朝来市梅田古墳群では５世紀前半頃から５世紀後半（須恵器ＴＫ208型式）の間に刀子が片関から両関へ移行している。そして、古墳時代中期末以降に全長15cmを超える大型の刀子が出現する傾向があると指摘する。(3) 方谷古墳群でも、４世紀末から５世紀初頭の５号墳から片関の刀子、６世紀中頃の４号墳からは両関の刀子が出土している。また、４号墳出土の（Ｍ４）は残存長13.2cmであるため、本来は15cm以上の大型品であったと考えられる。このことから方谷古墳群でも梅田古墳群と同様に古墳時代中期以降に刀子が大型化する傾向が認められる。

ＳＫ１から出土した鉄鎌（Ｍ９）は柄部の先端を折り曲げる特徴のある形をしている。このような鉄鎌は、兵庫県内では小野市南山古墳群土坑３から出土している。(4) この鎌は共伴する土師器から12世紀代と考えられている。（Ｍ９）と同じ周溝内から出土した土師器皿は12世紀末と考えられるため、（Ｍ９）も12世紀から13世紀代と考えられる。ＳＫ１は埋没した周溝に作られた土坑である。このことから２号墳の周溝は12世紀代には埋没していたといえる。

鉈（M６）は形態的特徴から時期を特定することは難しいが、出土した５号墳の特徴から４世紀末から５世紀初頭ごろと考えられる。

（２）５号墳第２主体部について

５号墳第２主体部は箱式石棺の上面に石を積み上げる構造を持つ。このような石棺の分類を行った福永伸哉氏はこれらの石室を小竪穴式石室と呼称し、その定義を「内法全長が３m未満、壁体のすべてまたは一部が２段以上の積み石で構成されているもの」としている。そして小竪穴式石室は石積み小竪穴式石室と石棺系竪穴式石室の２タイプに分けられ、石棺系竪穴式石室はさらにａ型からｄ型の４種類に細別できるとしている。(5) この分類に従うと、５号墳第２主体部は石棺系竪穴式石室ｂ型に当てはまる。

方谷古墳群の近隣において小竪穴式石室は山東町柿坪中山古墳群２号墳、１Ａ号墳、３号墳や、和田山町梅田古墳群15号分などで確認されている。これら古墳の時期は出土遺物などからいずれも４世紀から５世紀初頭の間に位置づけられる。これら古墳と方谷古墳群５号墳では、直線的な区画溝、地山成形による方形状の墳丘など共通する点も多い。また、５号墳第１主体部では刀子と鉈が副葬されており、但馬地域の伝統的な小規模古墳の特徴を示している。第２主体部は第１主体部を避けるようにして築かれている点などから、２つの主体部はそれほど時期差があるとは考えられない。このことから５号墳は４世紀末から５世紀初頭の但馬の伝統的な墓制を踏襲した古墳ということができる。

（３）方谷古墳群について

方谷古墳群は２～４号墳が６世紀中頃、５号墳は４世紀末から５世紀初頭に築造時期が推定できた。１号墳からは時期の決め手となる遺物が出土していないが、墳丘の築造方法などから２～４号墳に近い時期が想定できる。これら各古墳から導き出される特徴から古墳は２グループに分けられる。ひとつは５号墳で見られる方形状の墳丘、鉈や刀子を副葬するなど但馬地域の伝統的な墓制を踏襲した古墳。もうひとつは１号墳～４号墳で見られる円形を意識した墳丘、須恵器や新しい特徴を持った刀子の副葬など５号墳とは異なる様相を示す古墳である。これらの特徴の違いは古墳が築かれた時期差によるものである。

但馬地域では弥生時代以来「一墳丘多埋葬」を特徴とする墓制が普遍的に認められる。方谷古墳群周辺では、和田山町東梅田古墳群、山東町柿坪中山古墳群などがこれにあたる。それが、５世紀半ばから６世紀初頭頃には、山東町森向山古墳などで見られるように、「一墳丘一埋葬」へと墓制が変化する。その後、６世紀末ごろからの本格的な横穴式石室の導入により、再び「一墳丘多埋葬」が認められるようになる。方谷古墳群では、５号墳が弥生時代以来の「一墳丘多埋葬」を引き継いだ古墳であるといえる。一方、１～４号墳は小型の石棺を第２主体として持つものもあるが、基本的には「一墳丘一埋葬」といえる。６世紀中頃は、時期的に横穴式石室導入期にあたるが、１～４号墳は「一墳丘多埋葬」といえる状況ではない。これら１～４号墳を築いた集団は、新しい墓制を見据えつつも、それまでの伝統的な墓制を維持していた集団であったのであろう。

〔註〕

１．魚津和克「鉄製農耕具副葬についての試論」『表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会　2000
２．杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』8
３．『梅田古墳群Ⅰ』兵庫県教育委員会　2002
『梅田古墳群Ⅱ』兵庫県教育委員会　2003
４．『浄谷遺跡　南山古墳群　玉津田中遺跡南大山地点』兵庫県教育委員会　1993
５．福永伸哉「近畿地方の小竪穴式石室」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学南原古墳調査団　1992

写真図版

写真図版１

古墳群調査前全景（北から）

古墳群調査後全景（北から）

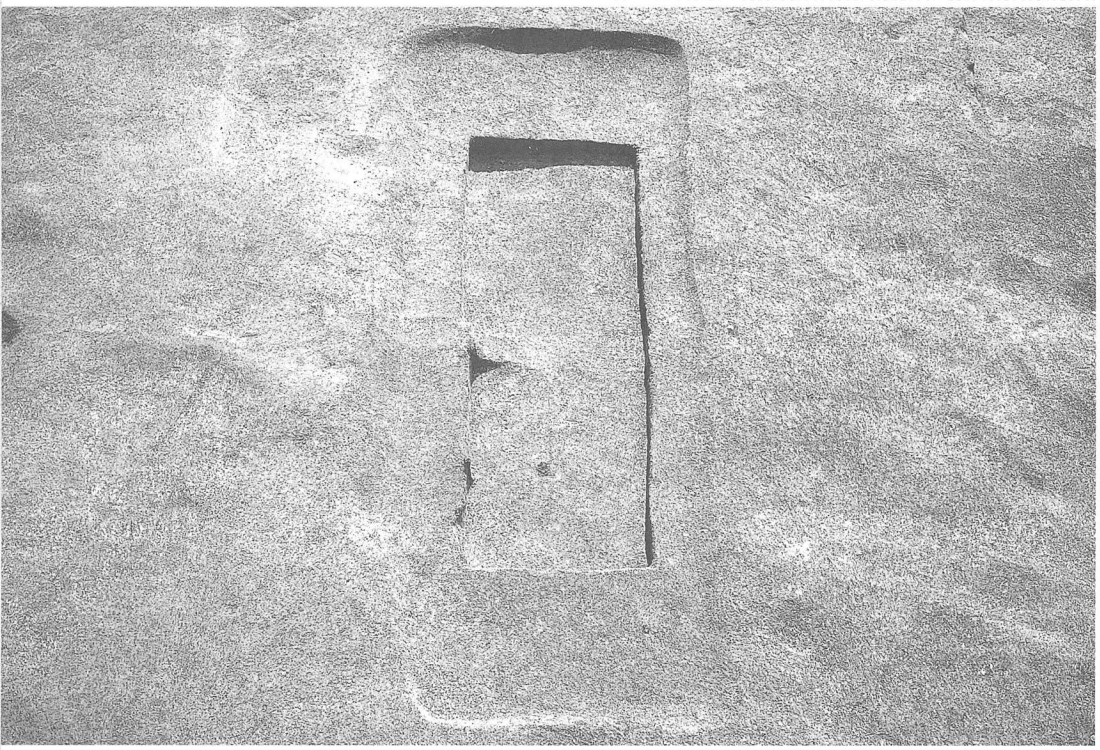
古墳群調査前近景
（西から）

古墳全景
（南東から）

第２主体部
（北西から）

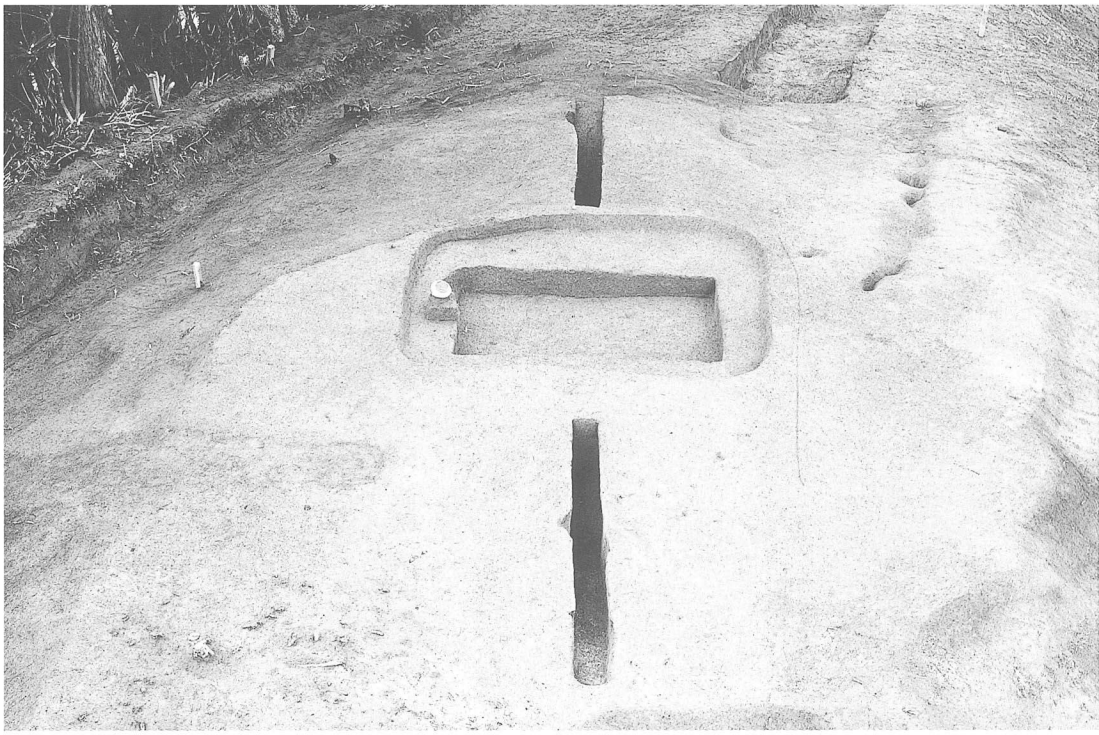
写真図版３　２号墳

古墳全景
（南東から）

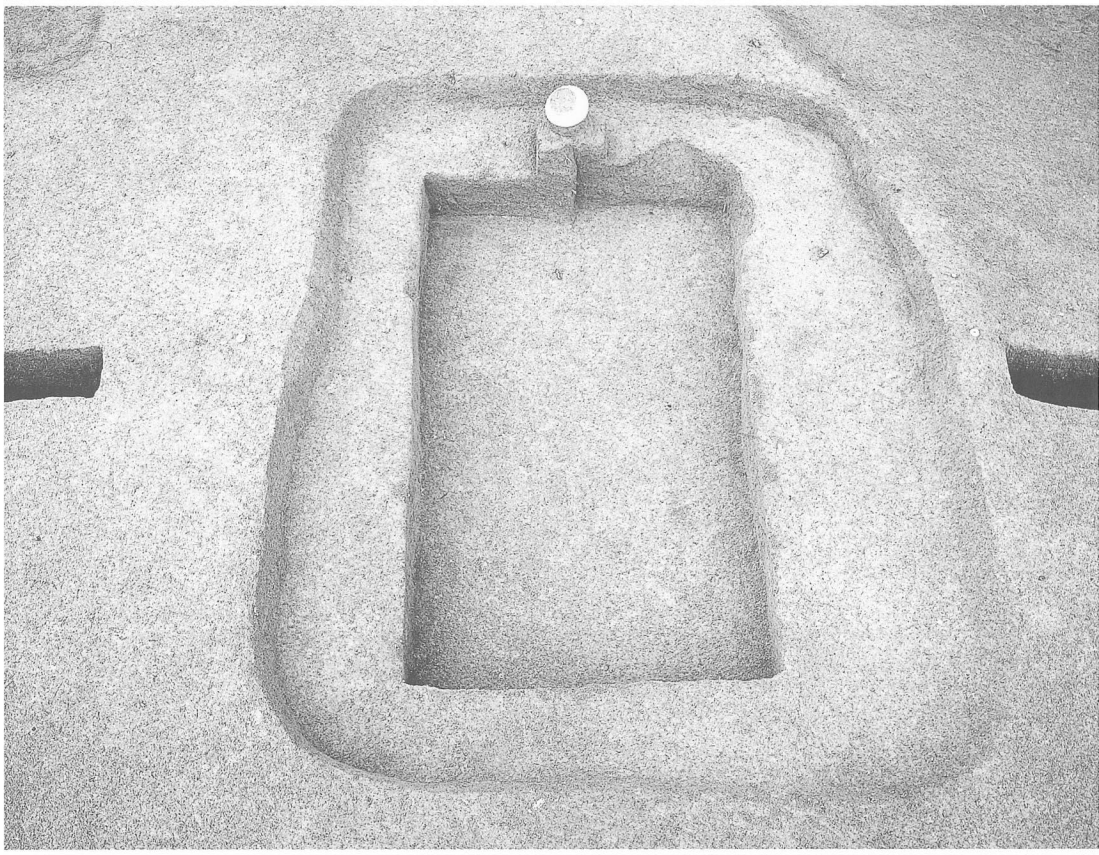


主体部
（南西から）

貼り石
（北西から）



古墳全景
（東から）

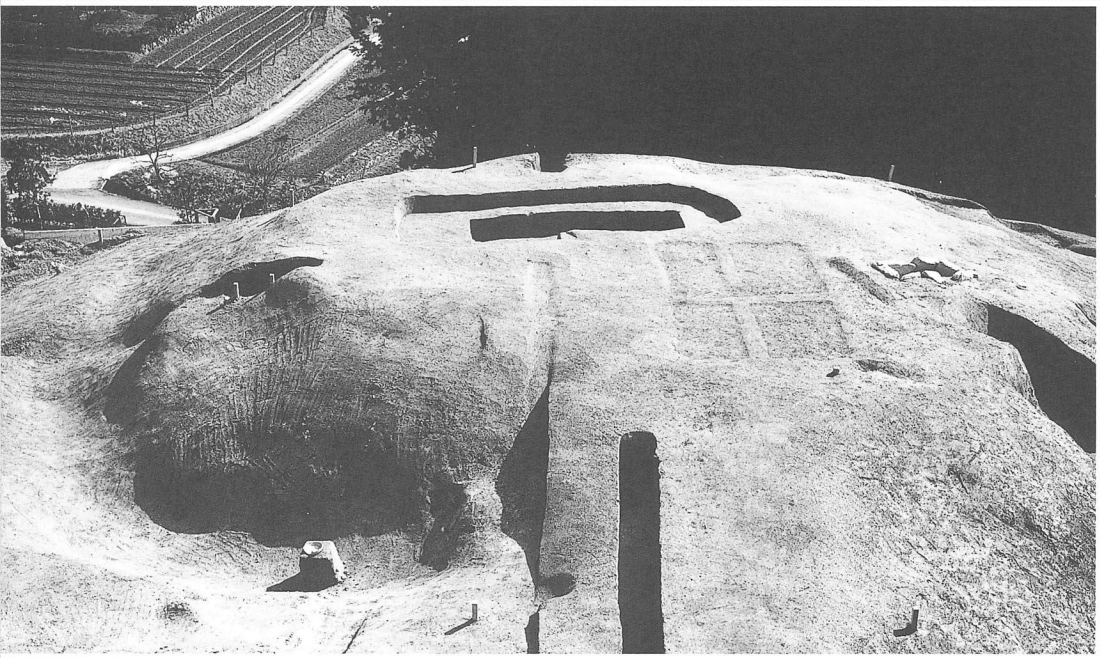


主体部
（北から）

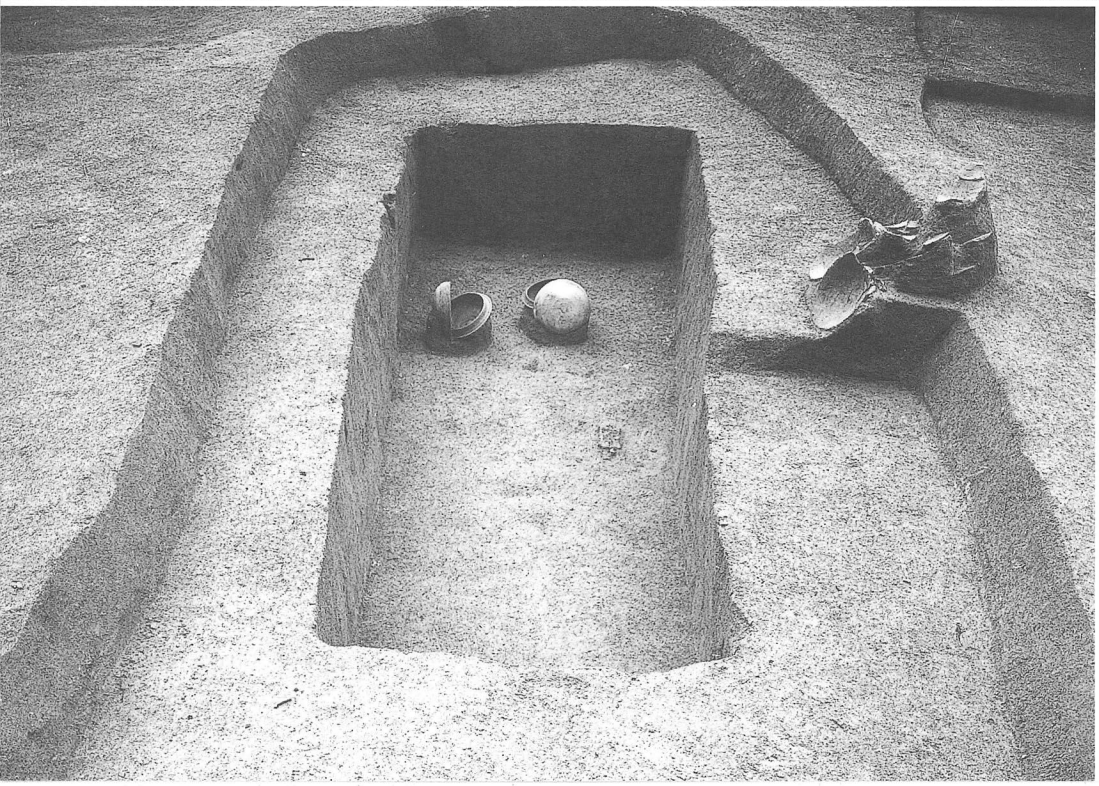
主体部遺物出土状況
（南から）

写真図版５　４号墳

古墳調査前全景
（北から）

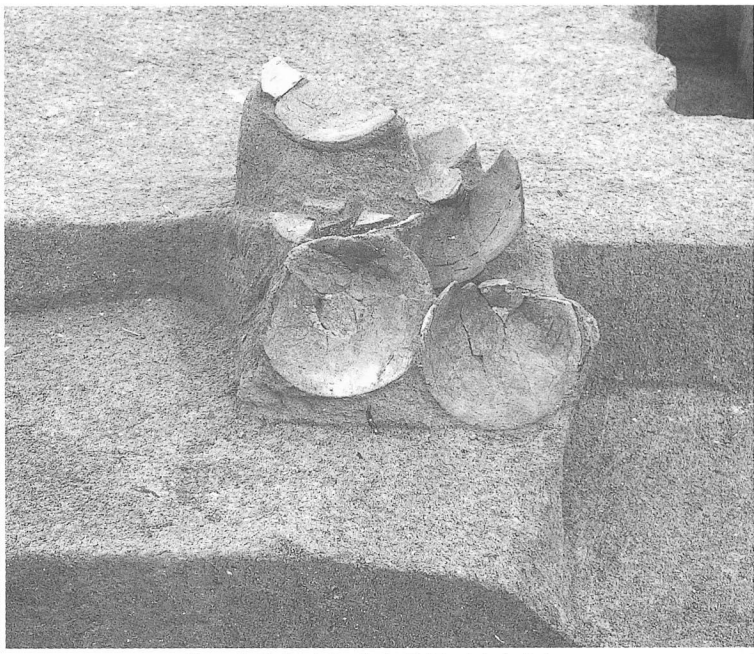


古墳全景
（北から）

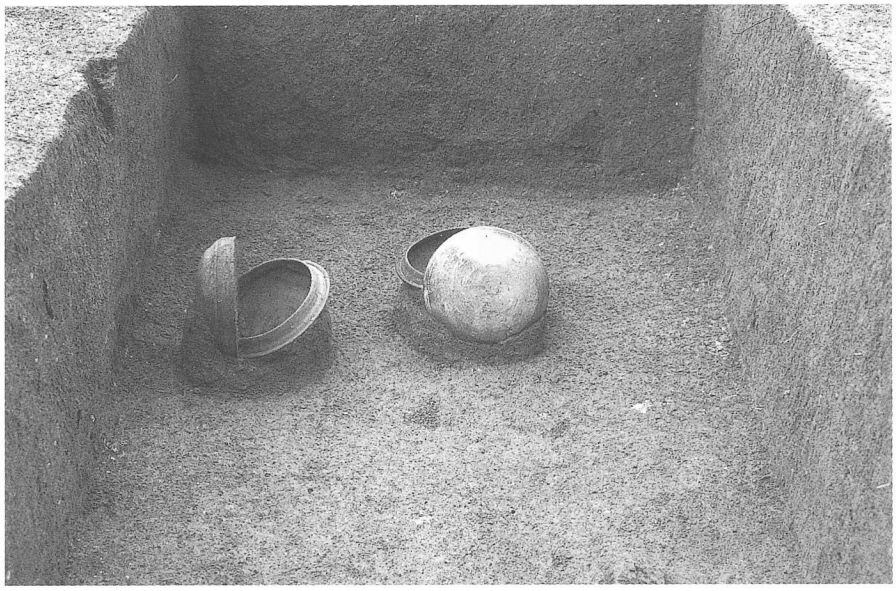


第１主体部
（北東から）

第１主体部遺物出土状況（南から）

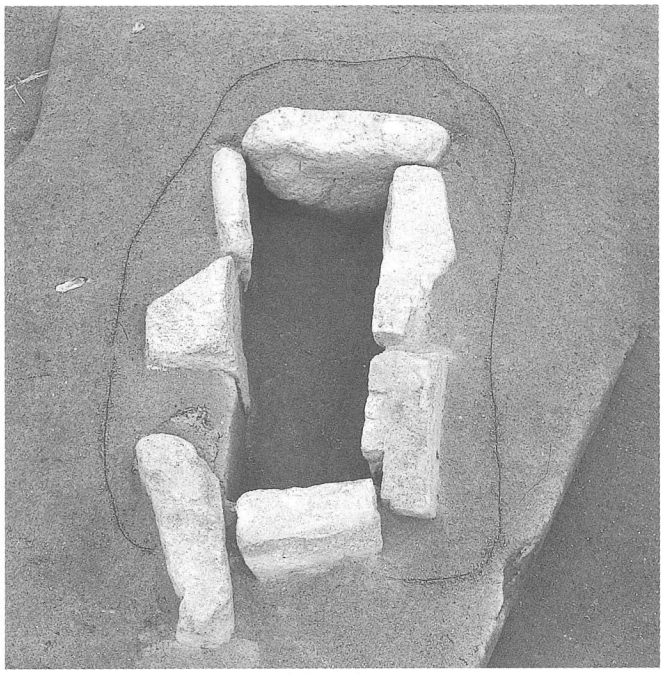


第１主体部高坏出土状況（南から）



第１主体部須恵器坏出土状況（北東から）

第１主体部刀子出土状況（北東から）

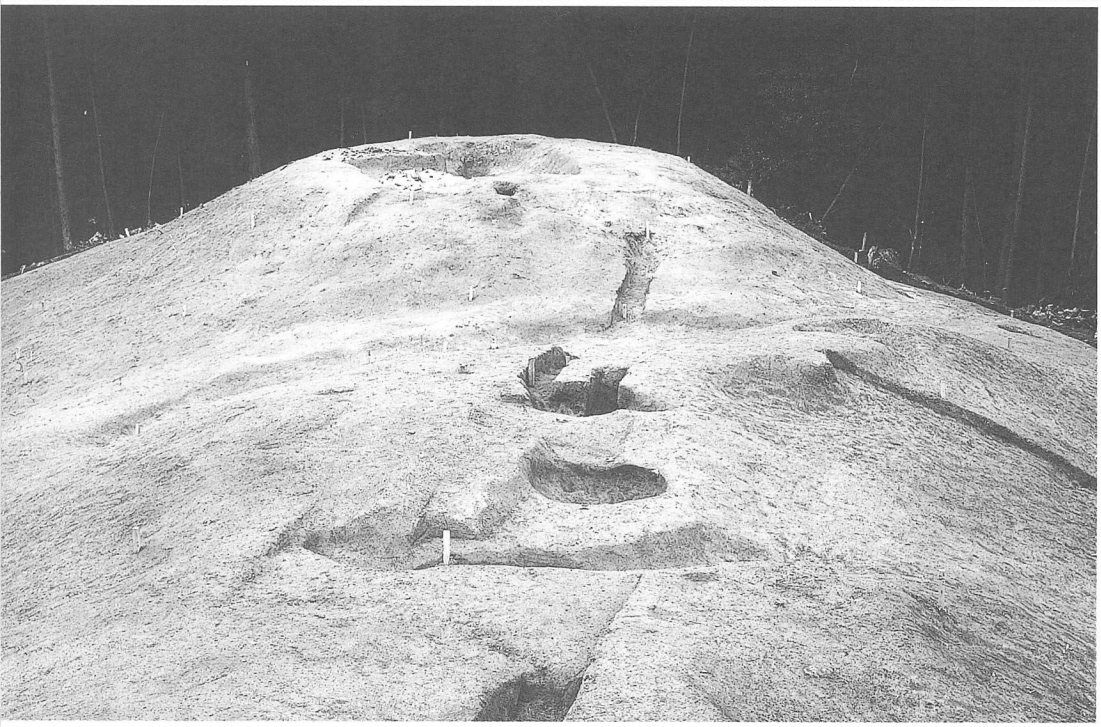


第２主体部（南西から）

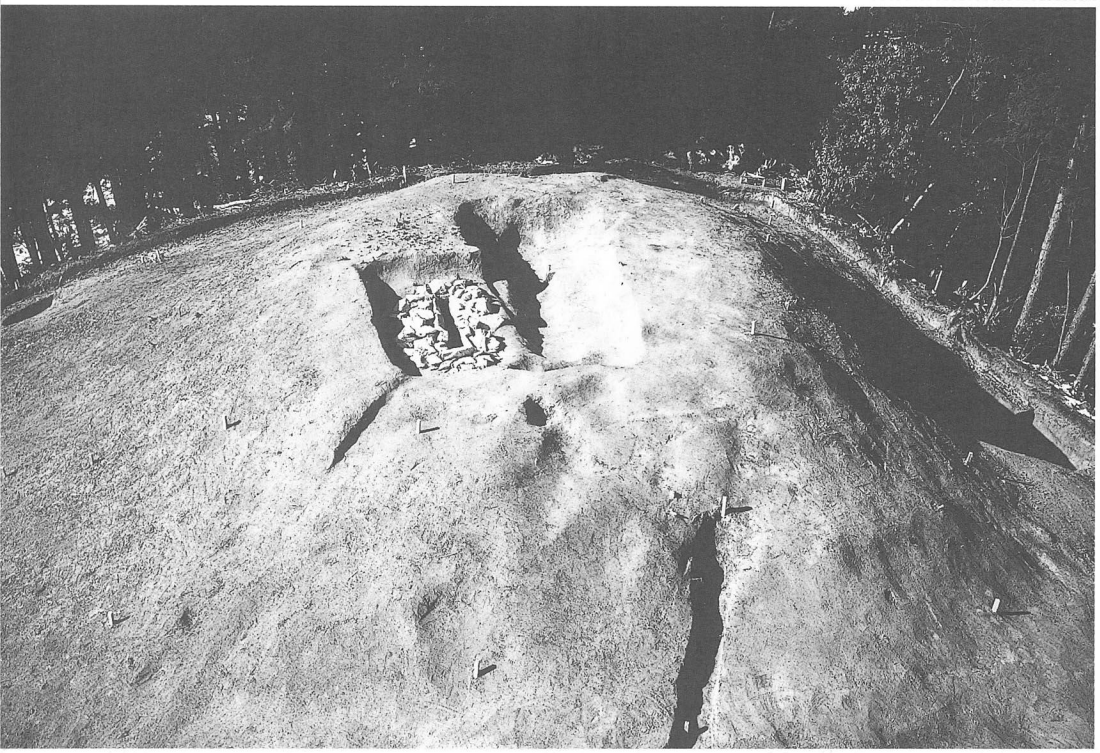
周溝断面、遺物出土状況（北西から）

写真図版７　５号墳

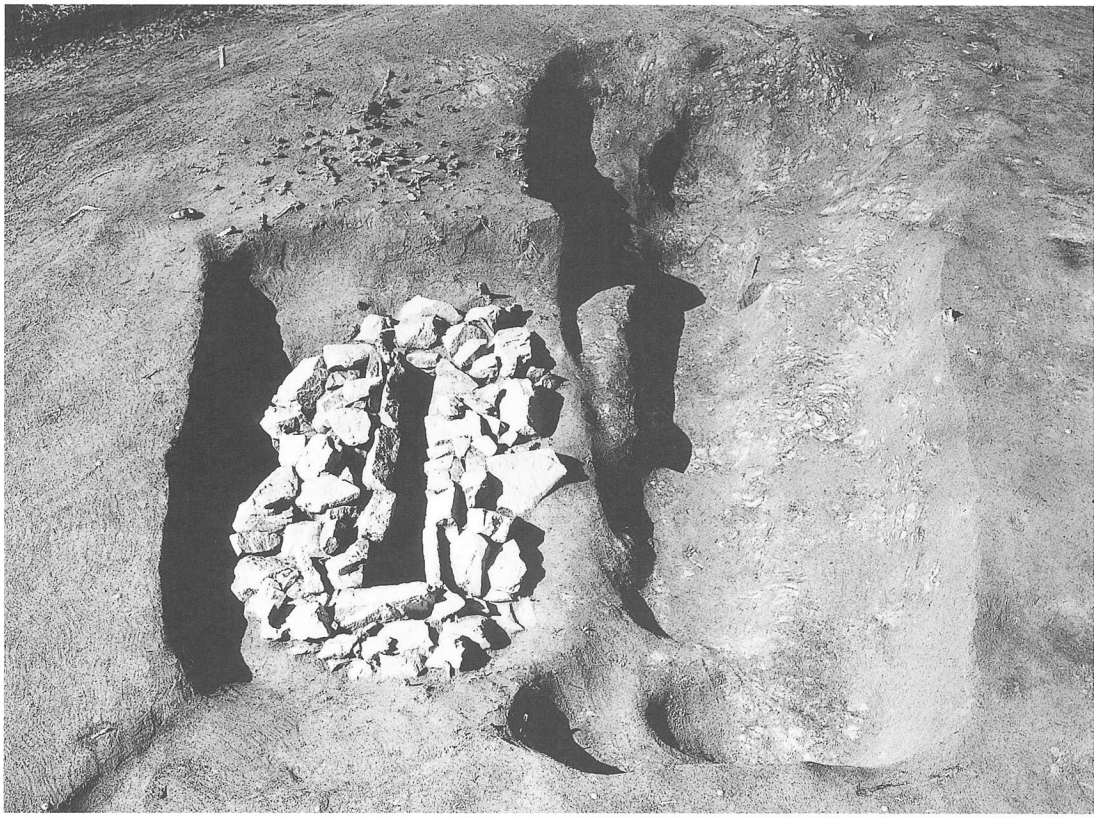
古墳調査前全景
（南東から）



古墳全景
（南東から）



墳頂部全景
（南東から）



第１主体部、第２主体部近景
（南東から）

第１主体部鉄器出土状況
（南西から）

第１主体部全景
（南東から）

写真図版９　５号墳第２主体部

主体部検出状況（北西から）

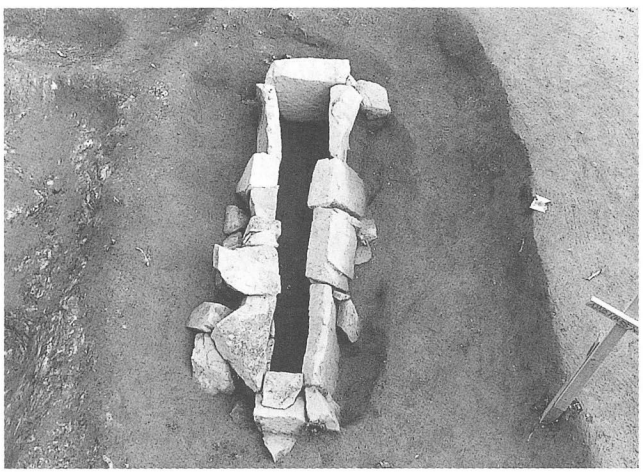
主体部検出状況（南西から）

蓋石検出状況（北西から）

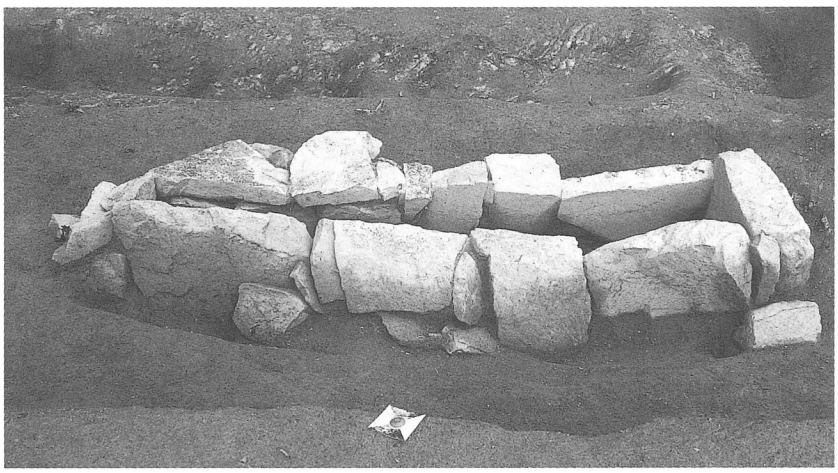
蓋石検出状況（南西から）

蓋石除去状況（北西から）

蓋石除去状況（南西から）



石棺検出状況（北西から）

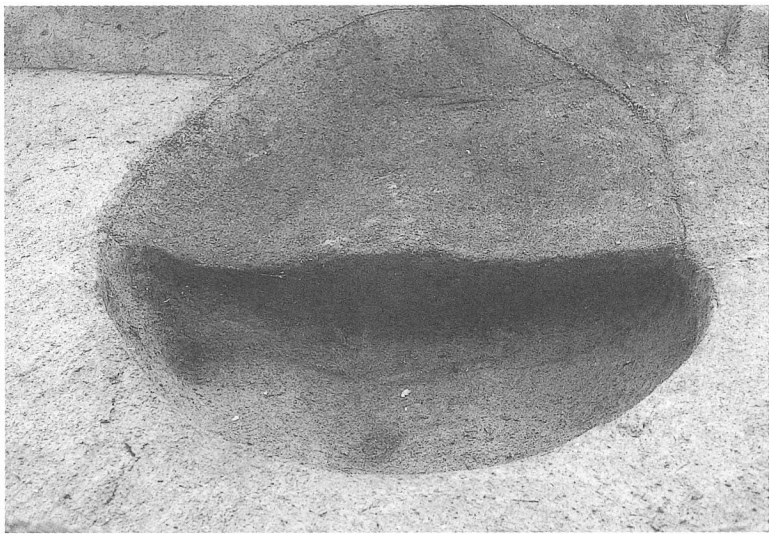


石棺検出状況（南西から）

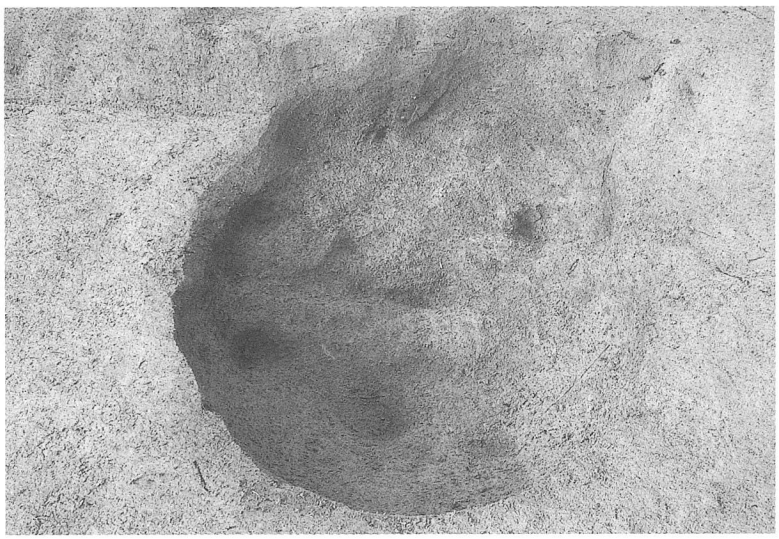
ＳＫ１（北西から）

ＳＫ２（東から）

ＳＫ３（西から）



ＳＫ４（東から）

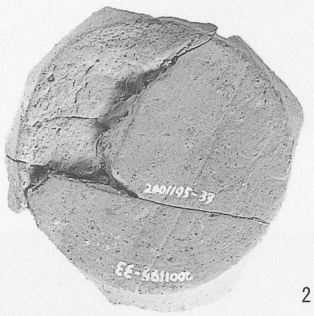


ＳＫ５（東から）

ＳＫ６（南東から）

２号墳

1



2

3

4

M1

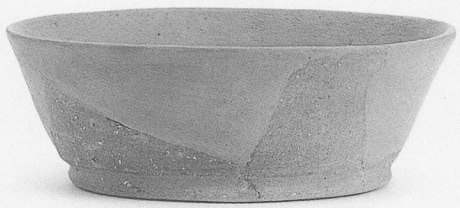
３号墳

5

6

7

8

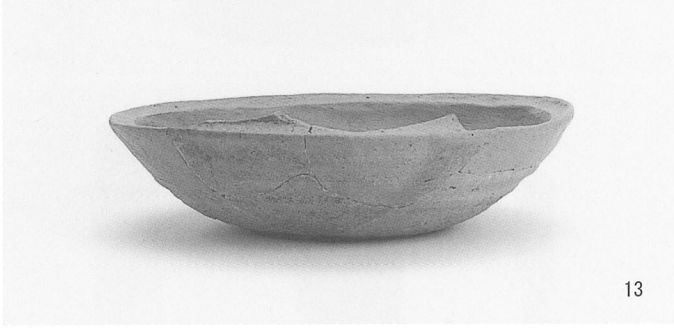

9

4号墳

10

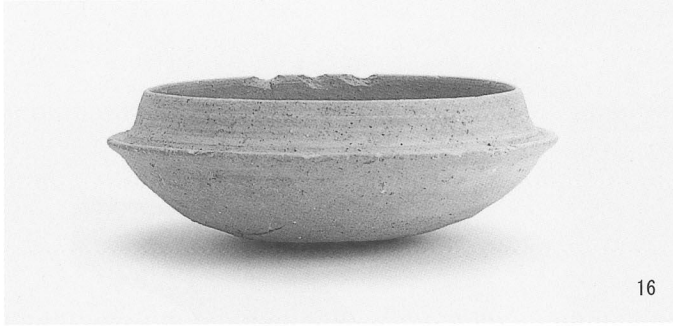
11

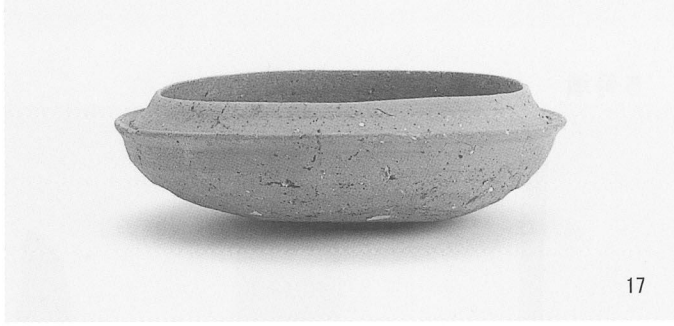
12


13

14

15

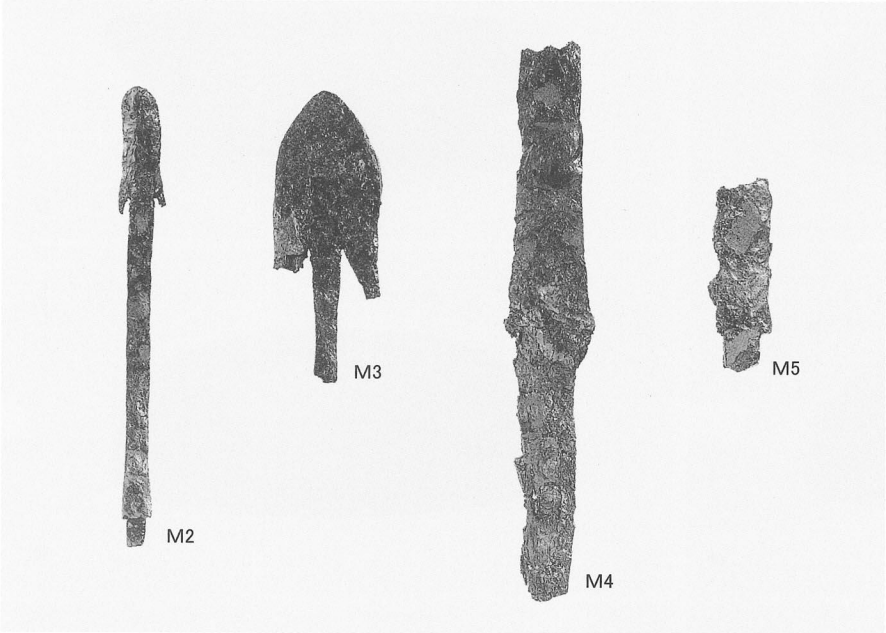

16


17

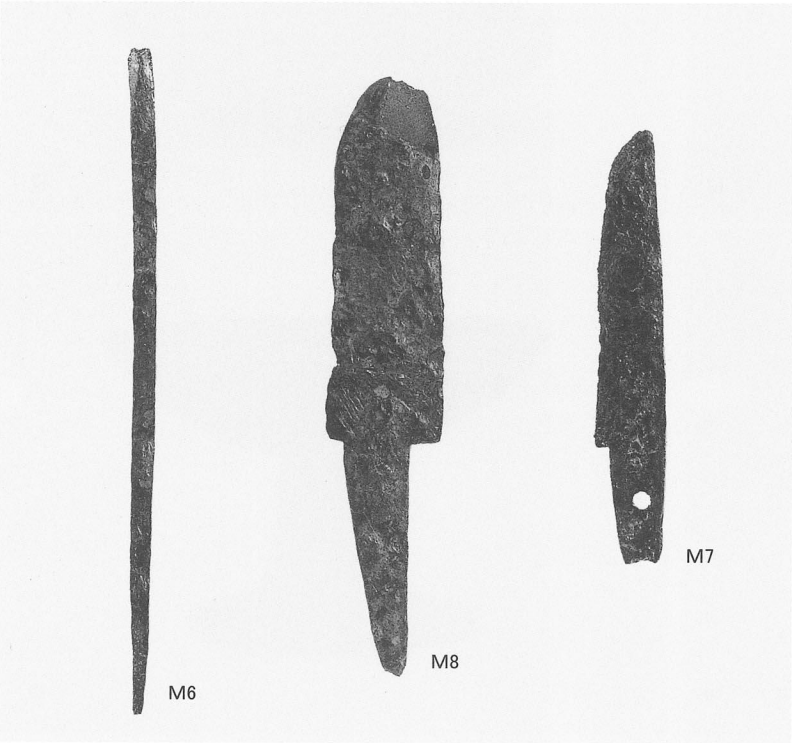
18

19

４号墳



５号墳



ＳＫ１

報　告　書　抄　録

ふりがな	ほうたにこふんぐん
書　　名	方谷古墳群
副 書 名	一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第330冊
編著者名	小川　弦太
編集機関	兵庫県立考古博物館
所 在 地	〒675-0142　加古郡播磨町大中500　Tel 079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所 在 地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10-1　Tel 078-341-7711
発行年月日	2008（平成20）年３月４日

(ふりがな) 所収遺跡名	(ふりがな) 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡調査番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ほうたにこふんぐん 方谷古墳群 遺跡番号	あさごし 朝来市 さんとうちょう 山東町 しば 柴 740676 ～740680	28255	2001195	３５度 １８分 １４秒	１３４度 ５５分 ０秒	2001.12.11 ～ 2002.03.15	1791㎡	一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設事業に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
方谷古墳群	古墳	古墳時代	石棺、木棺、土坑	須恵器、土師器、鉄鏃、刀子	

要　約	方谷古墳群中、５基の古墳を調査した。１号墳～４号墳は古墳の背後に弧状の区画溝を掘り、盛土によって墳丘を形成する古墳であり、主体部はいずれも木棺直葬である。遺物は、２号墳より刀子、３号墳より須恵器坏、短頸壷、４号墳より鉄鏃、刀子、須恵器坏、土師器高坏が出土している。５号墳は尾根を遮断する直線的な区画溝と地山を削ることによって墳丘を形成する古墳である。木棺直葬と小型竪穴式石室の主体部２基を持つ。木棺墓から鉇が出土している。１号墳～４号墳は６世紀中頃、５号墳は４世紀末から５世紀前半の築造と考えられる。

兵庫県文化財調査報告　第330冊

朝来市山東町

方　谷　古　墳　群

一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日和田山道路Ⅱ）建設に伴う発掘調査報告書－

2008年3月4日　発行

編集　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中500
TEL　079-437-5589

発行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL　078-341-7711

印刷　(株)岸本印刷所
〒676-0805　高砂市米田町米田400-1
TEL　079-432-0123